

フェリックス ラヴェッソン研究

(1)

小 玉 齊 夫

一 ラヴェッソンの生涯・著作

今日では言及されることも稀な『習慣について (*De l'Habitude*)』¹⁾の著者ラヴェッソンの生を概観するためには、アンリ ベルクソンがこの哲学者に捧げた『フェリックス ラヴェッソン—モリアン氏の生涯と著作についての略述』(1904年刊)に、ひとまずは、依拠しなければなるまい²⁾。

(1)

フェリックス ラヴェッソンは、1813年10月23日、帝政フランス下のサンプル・エ・ムーズ県の中心都市ナミュール(現在ベルギー領)で生まれた。時代的には、ナポレオン一世のフランスが、ヨーロッパでの全般的な統治・支配力を失いつつあった頃である。南仏モントオバン出身の父親フランソワ・ラシェ ラヴェッソンは、このナミュール市の経理・出納課に勤める官吏であったが、1814年、家族はフランスに戻り、翌年には父親が死去。幼いラヴェッソンの教育は、もっぱら、絵画を趣味としていた母と、母方の伯父のガスパアル・テオドール モリアンに委ねられることになった。八歳頃のフェリックス ラヴェッソンについては、「数学者であり、骨董店主であり、歴史家であり、そしてその全部でもあった」という伯父の回想が残されている。「神童」とまでは言わなくとも、さまざまなことがらに興味を抱き、並外れた知的理解力を示す子供であった、ということであろう。後年、ラ

ヴェッソンが、母親ポリヌの旧姓を加えて「ラヴェッソン—モリアン」³⁾と名乗るようになったのも、この伯父の求めによって、とされる。

パリのコレージュ ロラン高校⁴⁾に入学したラヴェッソンは、後にソルボンヌでヴィクトル クザンの代講もする哲学教授エクトル ポレ⁵⁾の指導のもと、主としてアリストテレス形而上学を学んだ。そして、おそらくは、そのポレの推薦を得て、1832年10月に再建されたフランス王立「道德・政治科学アカデミィ」主催の懸賞論文に応募したのが1834年12月、翌年4月には、それが最優秀二点のひとつ⁶⁾に選ばれているが、この時、ラヴェッソンはまだ二十二歳にもならない若さであった。

「アリストテレスの形而上学について」⁷⁾と題されたこの懸賞論文は、改稿され、『アリストテレス形而上学に関する試論』⁸⁾として結実、その第一巻は1837年、第二巻は1846年に刊行されている。ベルクソンは、ラヴェッソンが「みずから創造した言葉によって」、これまでは「非体系的で、総合よりは分析によって論ずることの多かった」アリストテレス形而上学を「再統一、再組織化することに成功」した（第一巻）ばかりでなく、「アリストテレス主義の精神そのものの開示」さえ企図した（第二巻）という評価を与えている。だが、同時に、ラヴェッソンの解釈には、彼に固有の偏倚のため、「いささかの批判を蒙らざるを得ない」面もあったことを指摘している。当時のフランスに於ける伝統的なアリストテレス観からの反撥があったのかもしれない。それに、ラヴェッソンの解釈じたい、必ずしもつねに正統性を目指す方向になかったことは、後の美術史の領域での諸論考・発言からも推測されないわけではない。

だが、いずれにせよ、哲学的な根拠の確定に際して、自己の独自性に拠らない哲学者は存在しない、という反論も、一般的には、認めざるを得まい。ここでは若きラヴェッソンの思索の根拠・哲学の端緒が、プラトンではなくアリストテレス形而上学にあり、ラヴェッソンはその新たな、自由な解釈⁹⁾を目指していた、という単純な事実を、そのまま受けとめておくことにした

い。

プラトンの甥で「アカデミア」の後継者でもあったスペウシッポスに関する論文、「事物の第一の原因についてのスペウシッポスの教義はアリストテレスによって如何なるものと見られていたか」¹⁰⁾とともに、1838年12月26日、パリ大学の博士号取得論文として公開審査の対象となったのが、冒頭に述べた彼の代表作『習慣について』である。

ベルクソンは、ラヴェッソンが「自己を発見した」のは『アリストテレス形而上学に関する試論』の「第一巻を出版してから第二巻を刊行するまで」、つまり、1837年から1846年の間と見ている。この時期は、別の観点から捉えれば、『習慣について』を完成させて以後ということにもなるが、母親の影響で幼い頃から絵を習い美術・彫刻に関心の深かったラヴェッソンが、レオナルド・ダ・ヴィンチを中心とするイタリア・ルネッサンス期の絵画に本格的に傾倒していく時期、でもある¹¹⁾。

(2)

ラヴェッソンの諸作品にふれつつ、その後の彼の経歴を、まず、辿っておくことにしよう。

既に1836年に大学教授資格試験¹²⁾に合格していたラヴェッソンであるが、教職にはつかず、翌年、ナルシス・アシルド・サルヴァンディが文部大臣になった際に、彼のもとで文部省官房長に就任している¹³⁾。二年後の1839年3月にモレ内閣が崩壊すると、この職を去り、同15日に文部省管轄下の公立図書館総監察官に就任(1853年まで)。その一ヶ月後の4月15日には、ブルターニュ地方レンヌ大学文学部の哲学教授職を提案されたが、実際にはこれを拒否したようである。「教授」ではなく、一時間だけの「非常勤講師」職であったという説もあるが、現時点からこの頃の履歴を確定するのは、他の諸点についても同様であるが、いささか困難と言わざるを得ない。二年間

(1841年まで)だけ名目的にレンヌ大学の教職についたが、本人はパリの文部省で働いており、知人のフランシス リオに代講を依頼していた、という説が、おそらく、「事実」なのであろう。なんととっても「ラヴェッソンは田舎の生活が大嫌いであった」というのだから…¹⁴⁾

この頃のラヴェッソンは、精神と自然との絶対的同一性を説くドイツ・ロマン派の哲学者フリードリッヒ シェリングに傾倒していた。同じ1839年の11月にはミュンヘンに赴き、数週間滞在して、シェリングに会い、その講義も聴いている¹⁵⁾。スコットランド派哲学の批判的紹介として1840年11月に発表された書評「現代の哲学—ハミルトン氏の『哲学断片』」も彼の業績に数えられるが、本来の職務である公立図書館総監察官の仕事としては、フランス南部及び西部、それにランやオタンなどの公立図書館所蔵写本のカタログをまとめ、1841年から1861年にかけて、公刊している¹⁶⁾。1845年、ドサルヴァンディが文部大臣に復帰すると、再び請われて参事院調査官を兼任したが、1848年の二月革命後には、この職務を解かれた。翌1849年に高等教育総視学官(文学関係)に就任(1888年まで)。ナポレオン三世によるクーデタ後の第二帝政期、1852年3月9日には、旧友ヴィクトル デュリュイの要請で文部審議会委員となり、特に、リセの教育課程にデッサンの授業を導入するために積極的に活動。画家のドラクロワやアングル、フランドラン等¹⁷⁾で構成される「検討委員会」の委員長をつとめ、1853年12月29日の文部省令によって、その実現へとこぎつけている。デッサンに関するラヴェッソンの考えは、フェルディナン ビュイツソン編『教育辞典』(1882年刊)の「デッサン」の項¹⁸⁾にも述べられている。そして1863年には、これも当時の文部大臣ヴィクトル デュリュイから、改革されたばかりの大学教授資格審査試験(哲学部門)の審査主査に任命された。かつては「折衷哲学」の創始者ヴィクトル クザンが占めていた職責であり、哲学者ラヴェッソンも、文部行政にたずさわる学者・官僚として、それなりに高い地位に登りつめたということになる。『習慣について』と並ぶ彼の代表作『十九世紀フランス哲学に関する報告』¹⁹⁾が刊行されたのは1868年。

1870年6月、ナポレオン三世からルヴル美術館の古代美術ならびに近代彫刻部門担当学芸員に任命されて以後、ラヴェッソンの研究活動は古代ギリシャの美術や彫刻、特に彼自身が「神話に関する科学的な道具」と評価していた考古学に集中していった。幼少時の「教育係」でもあった考古学者の伯父の影響を、ここにも見る事が出来るかもしれない。1820年に発見されルヴル美術館に展示されていた『ミロのヴィナス』像を、自説に基づいて修復し、さらに、1863年に発見された『サモトラケの勝利の女神』像の基盤の修復にも従事、今日、我々が見ている姿へと変貌あるいは復元させている。特にミロのヴィナスに関しては、その調査報告および研究²⁰⁾を公にしている。彫刻等の複製鑄造物を陳列する新たな美術館の設立を提唱したのも、ラヴェッソンの古代ギリシャ彫刻への情熱の現われであった。彼のこの主張は、ベルクソンの記述によるなら、1882年開設のトロカデロの「比較彫刻美術館」によって実現されたことになる²¹⁾。

「碑文・文芸アカデミイ」の会員に選ばれたのは1849年11月10日²²⁾。その在籍五十年を祝う1899年11月10日の記念式典では、「理性と美という二人の女神”の友人ラヴェッソン」という讃辞・祝福を受けている。儀礼的な褒め言葉に過ぎないとも言えるが、ラヴェッソンの美術史関連の業績も、それなりに、評価されていたことが窺われる。レジョン・ドヌール勲章(グラン・トフィスイエ位)を受けたのは1862年、かつてアリストテレス形而上学に関する懸賞論文を提出した、あの「道德・政治科学アカデミイ」の会員となったのは1880年で、ラヴェッソンは68歳、ヴィクトル クザンが死んでから既に13年も経っていた。「遅すぎた」この選出に、ラヴェッソンを拒否しつづけた(といわれる)クザンの遺志を見る評者もいる²³⁾。

古代ギリシャ精神の具象化としての彫刻作品を愛し、宗教的秘儀にも関心を抱いていたフェリックス ラヴェッソンが、世紀末の万国博覧会に沸き立

つパリで死去したのは1900年5月18日。そのほぼ三ヶ月後の8月25日には、イタリアのトリノで倒れたギリシャ古典文献学者フリードリッヒ ニーチェが、療養先のドイツのヴァイマルで没することになる。

二 ラヴェッソンの位置（その1 クザンとラヴェッソン）

（1）

ベルクソンによる『略述』は、当時の学問的権威者ヴィクトル クザンとの確執によって“学者としての経歴を妨げられ、志を得ぬまま傍流を辿った不遇の研究者”というラヴェッソン像を浮かび上がらせている。当時既に一般的であった反クザンの潮流のなかでの発言であるにしても、このような見方は「事実」に合致しているのかどうか。

『略述』の前提となっているベルクソンの講演は、前任者を讃えることを暗黙の前提としているため、差しさわりのない飾り言葉を並べただけという可能性もある。だが、それでも、ベルクソンの言葉のはしばしには、「クザン並みの」社会的栄誉をラヴェッソンにも与えたかったという親身な好意が感じられないではない。

けれども、ことによると、ベルクソンの真意は、文部官僚となったため若い頃の才能をさらに開花させ得なかったラヴェッソンを、批判するとまでは言わなくとも、少なくとも惜しむところにあったかもしれない。ベルクソンも指摘しているが、依頼とか勧告などの外的な機縁がなければ、なかなか著作に励まない「素人性」が、ラヴェッソンにはあったようである。そして、それに加えて、ひょっとするとベルクソンの発言には、望んでいたパリ大学教授になれなかったベルクソン自身の感傷が、過剰に、投影されてしまったのかもしれない。

いずれにしても、今日の時点からの反応に過ぎないが、教授職に就いた・就かなかった、で、必ずしも、不遇な人生であったか否かが定まってくるわけではあるまい。ほぼ同じ時期の例をとれば、パリ・コムニヌ（1871年）

直後のフランスに滞在していた中江兆民に影響を与えた共和派の法学者エミール アコラスやジュール バルニ²⁴⁾などの生の軌跡が示すように、志を得たか得なかったかの判定は、「教授職」という基準によって後代から安易に下されるものではなさそうである。

自己の経歴に関するラヴェッソン自身の発言は残されていないため、推測で語るしかないが、ここでは、クザンとの相克に悲劇性を求めるような「人生上のドラマ」とは無縁に、ラヴェッソンは自身の思想を形成していったと考えたい。確かに、当時は、「クザンに楯突いたラヴェッソン」像の方が一般には受け入れられやすく、好意的な評価も得られやすかったかもしれない。だが、そのような外的な契機に基づくのではなく、ラヴェッソン自身の思想のなかに、本来的な「反クザン」の方向性を求めてみたい。その方が、芸術との幸福な接合をめざすラヴェッソンの哲学(形而上学)の在り様にも相応しいし、彼の個人的な志向(“趣味”)にも合致している、という見解に立ちたい。

若い頃から、ラヴェッソンには、社交界への出入りを好む、言うならば貴族的・保守的な趣味があった。母方のモリアン家の縁でパリのサロンが彼には開かれていたから、政治家ティエールや詩人アルフレッド ド ミュッセの知己を得たのもベルジオジョゾ公女のサロン、詩人ラマルティーン、作家のシャトオブリアンやバルザックと出会ったのも、レカミエ夫人のサロンとされる²⁵⁾。芸術(絵画・彫刻)へ傾斜していた知的エリート・文部官僚ラヴェッソンは、一般的には非・社交性を標識とするような、いわゆる講壇哲学者の在り様とは、必ずしも合致しない方向をめざしていたように思われる。

(2)

とはいえ、ラヴェッソンの人生に暗影を投げかけたとされるヴィクトル クザンについても、若干は、ふれておく必要がある。ここでは、まず、両者の外面的な関わりを、単なる「挿話」の水準で、見ておくことにしたい。

「折衷哲学」を主導したヴィクトル クザンは、1830年には王立文部審議会の会長になり（1850年まで）、1840年には文部大臣に就任するなど、19世紀半ばのフランス教育体制の内部で重要な位置・地位を占めていた学者であった。管理者と研究者との区別が明確な今日からは想像し難いが、教育体制の統括者クザンは、みずからが責任を有する管理手段を利用して、自身の思想の宣伝・浸透を企てたふしがある。1840年に博士課程論文審査を受けたジョゼフ フェッラーリの『サラリーマン化した哲学者たち』²⁶⁾には、クザンが、自ら関与していた高等師範学校や大学教授資格審査試験、王立文部審議会など、教壇を「背後から」支えている「四つの」制度を利用して、自身の哲学を浸透させようとした事態を批判的に描いている。本来ならば研究の領域でなされるべき彼の哲学の擁護を、クザンは、自身が作り上げるのに功績のあった教育制度によって、半ば公的に、推進したのである。

もっとも、クザンの「弟子」たちが「師」を見限ったのは、そのような管理者的な側面のみには反感を抱いたからではない。思想の方向が揺れ動いているながら、クザンは、それぞれの転換について、明確な説明を与えなかった（与え得なかった）からである。

ヴィクトル クザンが影響を受けた哲学・学派を時代順に挙げると、①彼の博士論文の対象であった「感覚主義」のコンディヤック、②コンディヤックには批判的なスコットランド派哲学（ダグラル スチュワート、トーマス ライド）、③そのスコットランド派哲学のフランスでの代表格であり、七月王制を支持したロワイエーコラル。その後は関心がドイツ哲学に向かい、④カント、⑤シェリングおよび⑥ヘーゲルに傾倒、1817年には、ヘーゲルに会いに、わざわざライン川を越えてもいる。以後は、フランスに戻って、⑦メヌ ド ビラン等。

このような「被影響性」は、仮にクザンが凡庸な「哲学・学者」であったならば、ことさらに批判の対象にはならなかったであろう。それに、1815

年、ロワイエーコラルから近代哲学史を担当する代理講師に任命されたクザンが、「革命の子」を自称する自由主義者・ロマン主義者でなかったならば。あるいは、時代が、クザンを、王党派である「師」ロワイエーコラルから引き離し、より尖鋭な方向へと向かわせなかったならば。

若きクザンが、その講義の急進性のためにソルボンヌならびに高等師範学校での教職を失い、家庭教師・文筆業で生活をたてていくのは1820年から。1828年には、容れられて教職に戻ったが、以後、自身が大学に於ける立場を確立していくにしたがって、クザンは微妙に周囲(特にカトリック派)との妥協をはかるようになる。しかも、たとえばスコットランド哲学に対するクザンの同調・共感は徐々に後退していくのに、その理由は明示されるに到らない。シェリングへの傾倒、ヘーゲルへの好意的態度についても同様で、接近してから離脱へと向かう過程は明確に提示・説明されていない。初めの好意的な姿勢が、いつのまにか無関心・拒否へと変わっていき、その移行の原因も不明なままなのである²⁷⁾。

これでは、クザンのこれまでの(あるいは、これからの)発言を信用してよいのか否か、疑問を持たざるを得なくなる。エクトル・ポレを初めとする「弟子」たちは、「師」の無節操な変貌を目の当たりにして、見て来たような表現を使えば、「啞然とした」ようである。フランスでは初めてと言ってよいほど「哲学史」の在り様を重視したクザンであるから、それぞれの方向転換に関しても、それなりの学問的な自負はあったに違いない。だが、周囲の批判のまなざしをあらかじめ見通して仔細に説明する冷静なちからは、不幸にして、持ち得ていなかったようである。

加えて(あるいは、それにもかかわらず)、七月王制下のクザンは、貴族院議員、アカデミィ・フランセーズ会員、そして文部大臣にもなるなど、行政上の権威も有していたのである。

今日では、このような「原則なき・権力者」としてのクザン像が定着しているためか、いくつかの文献でのクザンの生活・思想の描写・説明は、初め

から揶揄・嘲笑の方向に傾いていて、かつての学問的实力者に向けられる論調のものは少ない。公職から引退した晩年のクザンの、それなりの業績とも思われる「女性文学史」に関する著述も、専門外の、趣味の延長としての評価にとどまる。「折衷哲学」の開祖とされるクザンの、彼自身が規定した「折衷」という語彙も、スコットランド・ドイツ等の「外部の思考」とクザン自身の「内部の思考」との、表面的で不徹底な「連関づけ」に意義を求めただけ、と解されがちである²⁸⁾。ひとつの思想の紹介が終わった段階で、また新たな思想の紹介者の役割を演じたために、思想に内在する(はずの)矛盾点を取り上げることもせず、あるいは、取り上げても無原則に「折衷」させることで、クザンは、クザン自身の思想性を放擲してしまった、と見られたのである。ある意味では、当時のフランス思想の「後進国性」をクザンが典型的に表現してしまったために²⁹⁾、現時点からでは、ことさら評価を下す気にもなれないのかもしれない。

ベルクソンの感傷的な筆致によれば、1867年初め、療養のため南仏カンヌに向かうクザンを、ラヴェッソンはパリのリヨン駅まで見送りに出て、二三の言葉を交わすが、それがふたりにとっては最後の出会いになったという。「自身の生の方向を変えてしまった」(とベルクソンは考えている)病身のクザンに対し、ラヴェッソンは何を語ったのか。想像することじたい、既に、無意味としか言い様はないが、おそらく、決まりきった挨拶のことばが交わされただけであろう。たとえ、当人たちにしか了解されない、長い間秘められていた情感が、そこには込められていたにしても…

そして、この時のクザンとの訣れのすぐ後、既に五十代半ばになっていたラヴェッソンは、『十九世紀フランス哲学に関する報告』のなかで、「(ヴィクトル クザンの)折衷哲学とはまったく無縁であった」と、かつての自身の姿勢を振り返っている。

とはいえ、二十代のラヴェッソンにとってのクザン哲学は、やはり、眼前

の高峰として聳えていたかもしれない。そのクザン哲学、あるいはその前提ともなる十八世紀フランス哲学に対し、シェリングを仲介として始められたラヴェッソンの批判的な判断³⁰⁾は、どのように広げられ深められていったのか。時間をさかのぼって、彼の見解を、次節では具体的・内在的に、素描してみることにしよう。

(続く)

注

- 1) ラヴェッソンの『習慣について (*De l'Habitude*)』の初版本は1838年の学位論文 (Paris, H.Fournier & Cie, in 8, 48p、以下、「1838年版」と呼ぶ。以下、出版社所在地はパリ以外の場合のみ明記する) である。パリ国立図書館本の最終頁には、「博士号を求める文学士 J.-G. - Félix RAVAISSON が1836年12月X日に審査を受ける (動詞は未来形)」と印刷されており、Xの部分には「26」そしてその脇に「10H」(午前10時?)と、記載者不明の鉛筆での書きこみがある。「パリ大学文学部長 J. Vict. LE CLERC」による読了確認の添え書き (“Lu et approuvé”) の部分にも「1836年12月Y日」と付記 (印刷) されているが、Yの部分は空白のままである (この J. Vict. LE CLERC は、後の1853年にラヴェッソンが『ラン図書館所蔵写本カタログ』を編纂した際に、その解説を付した Victor LE CLERC と同一人物と思われる)。1894年の『道徳・形而上学雑誌』 (*Revue de Métaphysique et de Morale*) 1月号に掲載された『習慣について』 (pp. 1-35。以下、「1894年版」と呼ぶ) には、若干の字句の修正がなされている。本稿で参照した下記の諸本のうち、(A) (B) (D) 各本は1838年版に依拠して1894年版との異同を注記、(C) 本は1894年版に基づいて1838年版との異同を注記、(E) 本は (A) 本に基づいて、誤植等に訂正を施している。

- (A) *De l'Habitude* par Félix Ravaisson ; Nouvelle édition précédée d'une Introduction par Jean Baruzi (Félix Alcan, 1927)。一般には1933年刊とされているが、本稿で参照した私蔵本には「1927年刊」と明記されている。
- (B) Félix Ravaisson : *De l'Habitude*, Présentation par Jean-François Courtine (Vrin-Reprise, 1984.)
- (C) Ravaisson : *De l'Habitude (Corpus des Oeuvres de Philosophie en*

Langue Française; Fayard, 1984). *La philosophie en France au XIXe siècle* も収める。

- (D) Félix Ravaisson : *De l'Habitude*, Préface de Frédéric de Towarnicki (Payot & Rivages, 1996.) トワルニキの序文は、ラヴェッソンの著作に対するハイデッガーおよびプルウストの関心を取り上げている。プルウストへの言及は、これが初めてかもしれないが、ハイデッガーのラヴェッソンへの関心については、既に、ジャン ボフレが『十九世紀フランス哲学についてのノート』で、わずか一行であるが、「ハイデッガーはラヴェッソンに対して特別の評価 (“une estimation spéciale”) を与えていた」と記している (p. 18)。本稿で参照したボフレの『ノート』1984年版 (Jean Beaufret : *Notes sur la philosophie en France au XIXe siècle* ; J.Vrin ; 1984) は、1946年の講演原稿及び1956-1957年のリセ コンドルセに於ける授業草稿を再録・改稿したもので、これ以外にも1963年刊のボフレ「私家版」があるとされ、内容も異なっていないと思われるが、未見。ハイデッガーのこの「特別の評価」については、しかしながら、「ハイデッガーのどの著作にもそのような記述はない」として、評価の存在じたいを否定する見解も出されていた (Daniel Panis: 《Le mot “être” dans “De l'habitude”》, p. 63-64, dans *Les Etudes philosophiques*, 1993. 下記参照)。1997年刊のトワルニキ本序文は、これに対する反論として書かれたものに違いない。1945年9月にハイデッガーと会った時、「現存在」の哲学者は、パスカルやライプニッツ、ヘーゲルの名を挙げた後で、「ラヴェッソンの習慣に関する美しい書物は今も読まれているか?」と訊ねてきたことを、トワルニキは、典拠を示しつつ (F. de Towarnicki : *A la rencontre de Heidegger. Souvenirs d'un messenger de Forêt-Noire*, Gallimard-Arcades, 1993) 明記している。

- (E) Félix Ravaisson : *De l'habitude* (PUF, 1999. Introduction par Jacques Billard) *Métaphysique et Morale* も収める。

ラヴェッソンあるいは『習慣について』は、「言及されることも稀な」ことは確かであるが、十九世紀末フランスの、いわゆる「スピリチュアリズム」を代表する

哲学者として、また、その論考の内容の独自性によって、ここ数年来、注目を集め、再評価されつつある。最も網羅的なラヴェッソン研究書であるドミニック ジャニコの『ラヴェッソンと形而上学—フランス・スピリチュアリズムの系譜学』(Dominique Janicaud : *Ravaisson et la métaphysique -Une Généalogie du spiritualisme français -*; Deuxième édition, J. Vrin, 1997) が1997年に再刊されたことが、最近のラヴェッソン再評価の契機と言えるかもしれない。ジャニコのこの再刊本は、表題の変更、内扉に挿入されたラヴェッソンの肖像写真(下記注24参照)の省略、かなり多かった誤植の訂正(もともと、この1997年再刊本でも、著者自身による訂正も含めて、Introduction (pp. 1-35) だけで「errata」が7箇所もあり、依然として誤植は少なくない)などはあるが、内容的には、1969年刊の初版本『フランス・スピリチュアリズムの系譜学—ベルグソン思想の源泉：ラヴェッソンと形而上学 (Une Généalogie du spiritualisme français. Aux sources du bergsonisme : Ravaisson et la métaphysique; La Haye, Martinus Nijhof, 1969)』と同じである。

上記(D)および(E)本にも、それぞれの編者による簡潔なラヴェッソン研究・講読が付されている。また、巻末にラヴェッソンの『芸術(Art)』についての項目(下記注18参照)を収めたル ラヌウ編の『ラヴェッソン』(Jean-Michel Le Lannou : *Ravaisson*; 内扉に *Etudes sur F. Ravaisson* とある。Kimé, 1999年3月刊)は、小冊子ながら、1998年5月13日パリ郊外フォントネイの高等師範学校(エコール・ノルマル・スュペリウル)で開催された「ラヴェッソンの日」に於ける、『習慣について』の研究発表を修正・改稿した論考4編が収録されている。また、『哲学研究』(*Les Etudes Philosophiques*)誌は、1984年10月—12月号で「フェリックス ラヴェッソン」特集(注6参照)、そして1993年1月—3月号では「ラヴェッソン 知性と習慣」特集(注26参照)と、ほぼ十年の間をおき二度にわたってラヴェッソン研究の成果を公表している(ともに、7編の論考を掲載。詳細は「参考文献」として一括して記載する予定)。

ラヴェッソン『習慣について』の日本語翻訳は、昭和13年8月に岩波文庫版(野田又夫訳『習慣論』)が刊行されているが、著者ラヴェッソンの紹介は付されていない。九鬼周造は、『西洋近世哲学史稿』(岩波書店、1948)に於いてはラヴェッソンの名を挙げていないが、『現代フランス哲学講義』(岩波書店、1957)では「Néo-spiritualisme」の哲学者ラヴェッソンの思想紹介に7頁ほどをあてている(1975年版、pp. 280-286)。ただし、ラヴェッソンの具体的な生涯・経歴は記されていない。

澤潟久敬『フランス哲学研究』（勁草書房、1960）にラヴェッソンの名はない。比較的最近の研究書では、三輪正『習慣と理性』（晃洋書房、1993）が、その第七章で、「ラヴェッソン—自然と習慣」と題して『習慣論』等の紹介を行なっている（pp. 171-195）。三宅中子『習慣と懐疑』（南窓社、1985）では、ラヴェッソンの名は挙げられているが、彼の習慣の考察等について、具体的な言及はない。

- 2) アンリ・ルイ ベルクソン（1859-1941）の《Notice sur la vie et les œuvres de M. Félix Ravaisson-Mollien》は「道德・政治科学アカデミー（Académie des sciences morales et politiques）」（下記注6参照）の会員に選出されたベルクソンが、慣例にしたがい前任者ラヴェッソンの功績をたたえる目的で、1904年2月に行なった講演（の草稿）である。同年の『道德・政治科学アカデミー報告書』に掲載された。さらに1933年、シャルル ドヴィヴェズが、ラヴェッソンの遺稿等を集めて出版した『哲学的遺書および断片』（Charles Devivaise : *Testament philosophique et fragments*; J.Vrin, 1933. ラヴェッソンの死後、グザヴィエ レオンが『道德・形而上学雑誌』（1901年1月号）に発表した「哲学的遺書」を、他の遺稿とともに再録・編集したもの）にも、ラヴェッソン紹介のための「序」として、収められている（ただし、その1983年版では、ベルクソンのこの『略述』は省かれている）。後に、表題から「略述」という語を削除し、姓も「ラヴェッソン—モリアン」から「ラヴェッソン」に改めて、ベルクソンの『思想と動くもの』（1934年刊）に収録された。本稿で依拠したのは、ベルクソン『著作集』（*Œuvres. Edition du Centenaire*, PUF）1963年版であるが、煩雑を避けるため、個々の引用箇所指摘は省略してある。

なお、かつてはベル「グ」ソンと表記されていたベル「ク」ソンであるが、ワルシャワに居住していた世代の Ber Sonnenberg から、Berksohn あるいは Berkson、そして Bergson へと到る、その家系および家名表記については、Philippe SOULEZ, Frédéric WORMS : *Bergson* (Flamarrion, 1997) に詳しい（pp. 25～35）。ポーランド系ユダヤ人であるアンリ ベルクソンがフランス国籍を取得したのは、成人に達した時（当時は22歳）であった（同 p. 57, p. 309）。

ラヴェッソンの経歴に言及している著作等は、それほど多くはない。それに、職に就いた年代なども、必ずしも明確ではなく、日付けも統一されていない場合が多い。「ひとまずは」ベルクソンの著作に依拠するのは、ベルクソンによる簡明で巧みな紹介が、ラヴェッソンの学問的意義を一般に明らかにしたものとして無視し得

ないからであるが、その後のラヴェッソン研究と対照させると、細部の記述の相違は生じており、果たしてどちらが正確なのか、残念ながら、今日では確定し難い場合が多い。たとえば、1933年刊のジョゼフ ドップによる『未刊資料に基づいた、ラヴェッソンの思想形成』(Joseph Dopp : *Ravaisson, la formation de sa pensée d'après des documents inédits* ; Louvain, Editions de l'Institut Supérieur de Philosophie, 1933)には、「ベルクソン本よりも正確」という印象の持てる記述があるが、それでも、上記注1の(E)本、ジャック ビヤアールの「序論 (Introduction)」には、ドップの指摘を否定している箇所もある。(E)本はドップ本の66年後の刊行であるだけに、さらに正確なラヴェッソン像が提出されていると考えたいが、残念ながら、ドップ本等を否定する明確な根拠が記されていないので、根拠があって否定したのか、単なる見落としなのか、根拠不明な他の記述を写しただけなのか、そのいずれであるのか不明、ということにしかならない。他の本の場合も同様で、ベルクソン本、ドップ本など、最終的にそのどれを採用すべきなのかは決め難いと言わざるを得ない。本稿では、主としてベルクソンならびに(あるいは)ドップに拠って記述し、他の記述と矛盾する場合や異なる場合には、可能なかぎり、それを注記することにした。

一致しない事項がある時、今日ではその根拠を明確に出来ないにもかかわらず「ひとつの説だけを取り上げて記す」よりは、「今日では確定し難いので、いくつかの説を挙げておく」とする書き方のほうが、より正確とは言えないにしても、錯誤を減らす方向にあるとは思われる。とはいえ、(E)本は、ラヴェッソンが「道徳・政治科学アカデミー」会員に選出された年を「ペスの後任として、1881年(1880年?)に…」と書いているが、こういう「?」をつけた書き方が適切なのかどうか。実際に眼にすると、いささか、迷わざるを得ない。ベルクソン本の記述では、「道徳・政治科学アカデミーは1880年にラヴェッソンを会員に選出した」となっているから、「選ばれた」のが「1880年」、「会員として実質的な活動を開始した」のが「1881年」ということであろう。

些細なことからであっても、参照する文献が多くなるにしたがって「多様な」記述内容となってくることは、十九世紀初めのことからであっても(あるがゆえに?)、かなり多い。ベルクソンは『略述』のなかで、ラヴェッソンの生年月日を1813年10月23日としており、いわゆる『十九世紀ラルウス辞典』(Larousse : *Grand Dictionnaire Universel du XIXe siècle*, 1875. 参照したのは1982年復刻版)も同じ日付けを採用している(ただし、「1838年から1840年までレンヌ大学に勤務した」とい

う箇所などから判断すると、いささか公式的で古い記述に基づいているようにも読まれる)。これに対して、ドップ本は、ラヴェッソンの生年月日を、論拠は示さずに、1813年10月13日としている。ベルクソン本、ドップ本をともに参照した者は、どちらに従うべきか、迷わざるを得ない。事実、上記(B)本は著者の生没年を記していないし、(A)、(C)、(D)本も、確定できなかったためであろう、生まれた年号(1813年)を記しただけで「月・日」は書いていない。(E)本も、死亡年月日は1900年5月18日と細かく記したにもかかわらず、生れた月・日は省略し、「彼は、1813年、ナミュールで生まれた」で済ませている。それだけ、ベルクソンとドップの記載の「相違」を意識していたということであろう。実際、「当時はフランス領であったが現在はベルギー領のナミュールで1813年に生まれた」という状況を思うと、今日の時点で生年「月・日」は確定し難いように思われる。本稿では、『道徳・政治科学アカデミー会員略歴』(Académie des sciences morales et politiques : *Notices biographiques et bibliographiques, Membres titulaires et libres, associés étrangers* ; Imprimerie Nationale, 1893)に於けるラヴェッソンの項の記述にしたがって(ここなら、おそらく、誤記・誤植はないであろうことを信頼して)、ドップ本の「10月13日」は「1813年という生年の、13という数字に影響された誤記あるいは誤植」と判断し、ベルクソン本の「1813年10月23日」をラヴェッソンの生年月日に採用する。

ついでに、ラヴェッソンの死亡日であるが、次に述べる「記念表示板」掲式典に於いて、最初に祝辞を述べたロベエル フォティエ (Robert Fawtier) は1900年5月4日に、後から祝辞を述べたオリヴィエ モロオーノレ (Olivier Moreau-Noret) は、1900年5月18日としている(下記b)資料による)。さらに、フランス国立図書館カタログの「ラヴェッソン紹介」の項には、「ロランズは没年を1901年としている」とあり、事実、1909年刊のオットォ ロランズ (ロレンツ?) 著の『フランス図書総合カタログ』(Otto Lorenz : *Catalogue Général de la Librairie Française*, vol. 15 ; Jordell, 1909)では「1901年に没」と明記されている。だが、「碑文・文学アカデミー」を代表して同副会長ド・ラストリイが述べた「弔辞」(*Funérailles de M. Félix Ravaisson-Mollien* : Discours de Monsieur le comte de Lasteyrie, vice président de l'Académie)の日付けは「1900年5月21日月曜日」であり、「碑文・文芸アカデミー」1900年5月25日の『例会議事録』(Académie des Inscriptions & Belles-Lettres : *Compte rendu des séances de l'année 1900*, tome 1, p. 313)には、例会の冒頭に「フェリックス・ラッシュェ ラヴェッソンーモリアン氏が、5月18日、パリで死去した、との書簡がシャルル ラヴェッソンーモリアン氏からアカデミー宛に寄せられた」という報告がな

されている。「1901年没」説は誤解に基づくもの、と判断する。

- a) ホファ編『古代より1850,1860年までの新・総人名辞典』(Hofer: *Nouvelle Biographie Générale depuis les temps les plus reculés jusqu'à 1850-1860*; Copenhagen, Rosen Kikle & Bagger, 1968)のラヴェッソン LAVAISON (Jean-Gaspard-Félix) の項 (p. 720)

- b) 『ラヴェッソンーモリアン家の建物外壁の「記念表示板」掲式』(Institut de France. Académie des Inscriptions et Belles-Lettres, Académie des Sciences morales et Politiques : *Inauguration d'une plaque commémorative apposée sur la maison de Ravaisson-Mollien, le mardi 26 octobre 1954*)
 - I: Discours de M. Robert Fawtier; au nom de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres.

 - II: Discours de M. Olivier Moreau-Noret, au nom de l'Académie des Sciences Morales et Politiques (1954)

上記b)の「建物外壁の“記念表示板”」とは、ラヴェッソンが晩年(1867年以降)に住んでいたパリの、セヌ川を前にした建物、「ヴォルテール河岸11番地」の外壁に掛けられているもので、「ラヴェッソンがこの建物で死去した」ことが記載されている。ただし、上述のような理由のためか、生年と没年1813-1900だけが記されていて、それぞれの月日は示されていない。ラヴェッソンの絵画やデッサンの師であり友人でもあった古典派の画家ドミニック アングル(1780-1867. ラヴェッソンの父親と同じモントオバン生まれ)も、ラヴェッソンと同じ建物に住んでいた。ラヴェッソンの記念表示板と窓ひとつを隔てて、隣り合って、向かって左側に、アングルがこの建物で死去したことを示す「記念表示板」も掛けられている(ラヴェッソンとは異なり、アングルの場合は、8月29日に生まれ1月14日に死去したという日付けが、はっきりと刻まれている)。上院図書館職員であった頃の作家アナトール フランスは、ヴォルテール河岸の延長で、ノートルダム大聖堂に近い方の、マラケ河岸に住んでいたが、自分に子供が生まれた時、「ラヴェッソンが住んでいる界隈で生まれたのだから、将来、この子が知性に欠けることはないだろう」と語ったという(上記b)資料による)。他愛もない言葉であり、発言じたい

の信憑性が疑われないでもないが、当時の「知識人」のなかでラヴェッソンが占めていた学者としての位置あるいは名声を想像させる話にはなっている。ベルクソンも、「セヌ川の素晴らしい眺め」が見られる書齋に招かれ、赤いチョッキを着たラヴェッソンと「芸術や形而上学、歴史など、あらゆることがらについて、つねにギリシャにさかのぼって、話し合った」とされる（ジャック シュヴァリエ『アンリ ベルクソンとの対話』(Jacques Chevalier : *Entretiens avec Henri Bergson*; Plon, 1926, p.239)。

- 3) ここまでは、ラヴェッソンの姓名を、一般的に受け入れられている言い方・書き方にしたがって、フェリックス ラヴェッソン (Félix Ravaisson) としてきたが、実際には、以下見るように、いささか複雑である。フランス国立図書館カタログでは、辞書・人名事典での記述を再録するかたちで、《 Ravaisson, Félix 》, 《 Ravaisson-Mollien, Félix 》; 《 Ravaisson-Mollien, Félix Lacher 》; 《 Ravaisson, Jean-Gaspard-Félix 》; 《 Ravaisson-Mollien, Jean-Gaspard-Félix Ravaisson, dit 》(ditは「～と言われる、通称」等の意)と、全部で五通りの表記(「姓」、「名」の順序)を挙げている。また、上記注1の(C)本の著者紹介では《 Félix Lacher, dit Ravaisson-Mollien 》とあるが、ベルクソンの『略述』では《 Jean-Gaspard-Félix Laché Ravaisson 》と記されている。そして、おそらく、これが最も正確なのではないかと思われるのが、前述の『道徳・政治科学アカデミー会員略歴』で、《 RAVAISSON-MOLLIEN (Jean-Gaspard-Félix LACHER-) 》と記載している(綴り字全体を大文字で記せば、通例は、それが「姓」であることを示す)。ところで、LacherとLachéとの相違ということになるが、Lachéは、ベルクソン本によれば、ラヴェッソンが絵を描いたときに用いた名であり、ドップ本はこれを受けて、さらに、父親 François Laché Ravaisson の「名」のひとつをとったもの、と付け加えている。これが正しいとすれば、「姓」ではなくて「名」を Lacher と綴るのは間違いということになる。(E)本は、ラヴェッソンの本来の「姓」が Lacher で、後に、「家族が所有していた」「(南フランスのモントゥバンの約40キロ北東の)ケリュス (Caylus) 付近の土地の名」である「ラヴェッソン」という姓を採ってラヴェッソンと名乗り、さらに、後年、「伯父」の姓モリアンを付け加えた、という説を提示している (p.6)。これに基づいて、(E)本は、「彼が素描画をサロンに出品するときには、(Lacherの最後のrを取り、いわば「不定形」を「過去分詞形」にして) Laché と署名した」と記している。ラヴェッソンという姓それじたいの由来、伯父の姓を付け加えたという (E)本の説は、ベルクソン本やドップ本に依拠したと思われるが、しかし、ベルクソン本もドップ本も、Laché につい

では言及し、「ケリュス付近の土地の名」である「ラヴェッソン」についても言及しているが、Lacherという「姓」表記については、何もふれていない。(E)本は、何故Lacherを「本来の姓」と断定したか、その理由を明示していないが、上記の『道徳・政治科学アカデミー会員略歴』の記載がその根拠かもしれない。他の辞書等の表記では、Lacherが姓であると決めつけるには、いささか曖昧な書き方である。この『会員略歴』の刊行は1893年であるから、ベルクソンもドップも眼にすることは出来たはずであるが、ラヴェッソンの「本来の姓」にまで言及する必要は認めなかったのかもしれない。フランスに於ける姓名の(行政的な面での)確定は「家族手帳 (livret de famille)」の交付が一般的となった1877年頃から、とされる (p. 48, Jean-Louis Beaucarnot : *Les noms de famille et leurs secrets* ; Lafont, 1990) から、それ以前は、ラッシュェ→ラヴェッソン→ラヴェッソン モリアンのような「恣意的な」変更も、比較的には容易であったのかもしれない。ベルクソンは、ラヴェッソンの伝記的事実に関しては、フェリックス ラヴェッソンの二人の息子である、ルイ ラヴェッソンーモリアン (1851-1922, マザリヌ図書館主任司書。上記ロランズ本には、イタリアのピサ生まれとある) とシャルル ラヴェッソンーモリアン (1848-?. ルヴル美術館副学芸員。同じくロランズ本ではパリ生まれ)、それに、後出のエクトル ポレ (注5参照) の二人の孫 (アンリ ベルネスならびにマルセル ベルネス) に話を聞いた、と典拠を明記しているので、誤記・誤植がなければ、そして、これらの肉親に極端な記憶違い・潤色がなかったとすれば、伝記的事実に関するかぎり、ベルクソンの記載を信用すべきなのであろう。一方、ドップ本は、上記の「エクトル ポレの二人の孫」と、「フェリックス ラヴェッソンの孫娘ジェルメヌ イウィル クラヴェル (Mlle Germaine Iwill Clavel)」に資料上の援助を受けたとしている (p. vii)。

複数の資料を相互に対応させてみると、細かいことながら、そしてやむを得ないとはいえ、どの本にも不確かな記述は出てくる。このことは、刊行年が新しい (E) 本についても同様であって、信頼するに足る記述なのかどうか、確定し難いところもある。たとえば、ラヴェッソンの父親の職業を、ベルクソン本ならびにドップ本は「帝政フランスの官吏でナミュール市の出納課に務めていた」としているが、(E)本では、南フランス出身で、そこ (ベルクソン本、ドップ本によればモントゥバンということになる) の出納課に務めていた」と読める (p.6)。だが、これでは、家族がナミュールにいたこと、ラヴェッソンがナミュールで生まれたことの説明がつけにくい。おそらく (E) 本の誤記と思われる。さらに、(E) 本では、ラヴェッ

ソンが育てられた「伯父の名」が「フランソワ モリアン」と誤解される書き方となっている (p.6)。だが、(E) 本が挙げている「フランソワ モリアン」も、実は、後述のように、「ニコラ・フランソワ モリアン」とすべきであって、いわゆる『十九世紀ラルウス辞典』に記されている「フランソワ ラヴェッソンーモリアン (François Ravaisson-Mollien, 1811-1884)」と同一人物ではない。後者は、「1811年にナミュールで生まれ、法学部出身の弁護士でありながらアルスナル図書館の主任司書 (conservateur) になった (人で) (...), フェリックス ラヴェッソンの兄」であり、「伯父」ではない。このフランソワ ラヴェッソンーモリアンの編纂した『バステイク古文書 (Archives de la Bastille)』を刊行したのが、フェリックス ラヴェッソンの息子であり、マザリンヌ図書館主任司書となった (上記の) ルイ ラヴェッソンーモリアン (フランソワ ラヴェッソンーモリアンの甥にあたる) ということになる。そして、ベルクソン本を中心とする複数の文献によるなら、幼い (我々の) フェリックス ラヴェッソンの教育に当たった「伯父」は、「フランソワ モリアン」ではなく、「ガスパール・テオドール モリアン」であり、これを覆すような具体的説明は (E) 本には付されていない。ここでは、「聞き書き」に基づいたベルクソン本に従うことにする。要するに、伝記的事項であっても、新しいからといって (E) 本に無条件に従うわけにはいかない一例であり、細部ではまだまだ不明な項目が多いことが確認される。

そのガスパール・テオドール モリアン (Gaspard-Théodore Mollien 生没年不詳) を、本稿では「伯父」と記したが、実際には「伯父」なのか「叔父」なのか不明であり、ここでは仮に「伯父」と表記するにすぎない (どの資料も “oncle” と記すだけで、フランス語での慣用表現がそうであるように、フェリックス ラヴェッソンの母親との「年令の上下」はことさらに記されてはいない)。ドップ本では、ナミュールを後にした母親はノルマンディ地方「ダンケルクに戻った」とされるが、これも、やがて死去することになる父親と別行動をとったということなのか、フェリックス ラヴェッソンだけが、ひとり、伯父に委ねられたのか、伯父はパリに住んでいたのか、等々の詳細は不明である。また、上記 (D) 本に収められたトワルニキの「序文」には、「《ministre》 (という「肩書き」を有する) モリアンと親戚であるおかげで」ラヴェッソンは社交界で云々、とあるが、この「モリアン」は、ラヴェッソンの母の「親戚」(ドップ本による。ただし、具体的な「間柄」は不明) で、1806年から1814年まで大蔵大臣 (Ministre du Trésor) をつとめ、七月王制時には貴族院議員になったニコラ・フランソワ モリアン (Nicolas-François Mollien 1758-

1850) のことであろう。九十歳を超えて長生きした(らしい) このニコラ・フランソワ モリアンも、ことによると、我々のフェリックス ラヴェッソンの「伯父」(のひとり) かもしれない。なお、トワルニキ本では、ガスパアル・テオドオル モリアンが大臣であったと混同されるような記述になっている。

- 4) フランスの「リセ」は、国民公会 (La Convention) によって設立された「中央学校 écoles centrales」に代わるものとして、1802年5月1日(革命暦10年花月2日)の法令により創設された。ただし、ラヴェッソンに関わる時期で言えば、1815年から1848年までは「リセ」という名称ではなく「王立高校(コレージュ ロワイヤル collège royal)」と呼ばれていた。ところで、ラヴェッソンが学んだ「コレージュ ロラン」であるが、『ラルウス大百科辞典』(*Grand Dictionnaire Encyclopédique Larousse*, 1994年版. 以下、GDELと表記)の「ジャック ドゥクウル高校(リセ)」の記述には、「パリ九区にある公教育機関。ニコル (G. H. Nicolle) によって1821年に創立された“コレージュ サント・バルブ (Collège Sainte-Barbe)”がその前身。(…) 1830年からは“コレージュ ロラン (Collège Rollin)”と名乗っている。後にパリ市立学校、次いで国立高等中学校(リセ lycée)となり、1945年に“ジャック ドゥクウル (Jacques Decour) 校”と改称された」とある。しかしながら、パリ九区トリュデヌ大通り (Avenue Trudaine) 12番地にあるジャック ドゥクウル高校前に立てられた「パリ歴史案内」標識の記述によれば、「1822年に創立されセエヌ左岸の狭いポスト通り (Rue des Postes. 現在のロモン通り Rue Lhomond) にあったコレージュ ロランの新校舎の建築が、1867年、(それまでは巨大な屠殺場があったこの場所で) 開始された。建築家はナポレオン オルジェ。新築された校舎での初授業は1867年に行なわれ、“寄宿舍の、非常に設備の整った共同寝室”や“モザイク模様の敷石が嵌め込まれた応接室”などが評判になった。ステファンヌ マラルメ(詩人)やベルクソンもこのリセで教えたことがあり、卒業生にはジョルジュ クウルトリヌ(劇作家)や、ジャン・ポオル ファルグ(作家)、そしてモオリス ユトリヨ(画家。日本ではユトリロと発音されている)などがいて、このリセの名を高めている。戦後になってから、対独抵抗運動により1942年にドイツ人に銃殺されたこのリセの教授ジャック ドゥクウルの名を採り、ジャック ドゥクウル高と改称された」となっている。GDELではコレージュ ロランが初めから九区にあったように読まれるが、現在のパリ五区ロモン通り(ロモン通り35番地角の壁面に、そこが、かつてのポスト通り17番地であったことを示す住所記載が、削りとられずに、残されている。ラヴェッソンは、1832年に、高校生対象の「学力試験」と

でも訳すほかない“Concours général”の哲学部門で優秀賞（Prix d'honneur）を獲得している—この試験が、パリの全コレージュ（ドゥップ本による）での優秀賞なのか、フランス全国のコレージュを対象とした試験（クザンの『道徳・政治科学アカデミーへの報告書』、ラヴェッソン紹介の項）での優秀賞なのか、現時点では不明である—が、その頃に彼が学んでいたコレージュ ロランは、この通りに在ったことになる）から九区に移って来たという「パリ歴史案内」標識の記述の方を正確と判断したい。「コレージュ サント・バルブ」については、下記注16参照。

- 5) ピエール・ジャック・エクトル ポレ（Pierre-Jacques-Hector Poret）の具体的な人物像は明確ではない。ドゥップ本でも、若い頃のラヴェッソンに「影響を与えた人物」の一人として、その紹介に一節をさきながら、「彼の個人的な思想面はよく知られていない」と記している。古代ギリシャ哲学史を専攻。十七、十八世紀のスコットランド哲学の翻訳（ジェムズ マッキントッシュ『道徳哲学史』：James Mackintosh : *Histoire de la philosophie morale, particulièrement aux 17e et 18e siècles*）もあるが、ドゥップ本（p. 62）によれば、この翻訳はヴィクトル クザン（1792-1867）から「依頼」（実質的には「強制」）されたもの、ということである。ポレが、ソルボンヌでヴィクトル クザンの「代理講師（Professeur suppléant）」を勤めたのは、1831年から1838年まで（「代理講師」は、特定の教授から個人的に「代役」を依頼された非常勤講師職のようである）。自己保身のため思想上の方向転換を繰り返すクザンから、ポレはしだいに遠ざかっていった（ドゥップ本、p. 16）が、このことも、ラヴェッソンの学問に対する姿勢に影響を与えたと思われる。たとえば、ラヴェッソンは、ルイ ペス（Louis Peisse）が1840年に翻訳・刊行したウィリアム ハミルトン（William Hamilton, 1788-1856）の『哲学断片』（*Fragmens de Philosophie*; Ladrance, 1840）をとりあげ、「現代の哲学—ハミルトン氏の『哲学断片』」（《*Philosophie contemporaine : Fragmens de Philosophie par M. Hamilton*》）という「書評」を『二つの世界・雑誌（*Revue des Deux mondes*）』に発表しているが（1er nov. 1840, pp. 396-427）、これは、スコットランド哲学に依拠していた頃のヴィクトル クザンに対する「明らかな批判」（ドゥップ本）であった。ポレの意図を代弁するという含みも、内的には、あったのかもしれない（1847年頃、フェリックス ラヴェッソンは、ポレの娘婿となつたとされるが、この「事実」を明記しているのはドゥップ本（P. 4）のみである）。公けになされたヴィクトル クザン批判として、この書評は、かなりの反響を呼んだとされる。ところで、後の1880年にラヴェッソンは「道徳・政治科学アカデミー」の会員に選出されるが、彼の前任者が、このハミルトンの『哲学断片』の訳者ルイ

ペスであった。ルイ ペスは、美術評論家としても知られ、1830-40年代の「サロン」(いわゆる社交的「サロン」ではなく、「公認の美術展覧会」を指す)に頻繁に顔を出していた(pp. 30, 33, 34, 36, 48. G-G Lemaire : *Esquisses en vue d'une Histoire du Salon*; Henri Veyrier, 1986)。そして、さらに、ついでに言えば、「学問の体系」に関する資料にあたっていた西 周は、『百学連環』のなかで「科学 (science)」の定義を『ウェブスター辞典』(1867年版か?)から採取しているが、そこに記されていた定義は、上記『哲学断片』の原著者である「エディンバラ大学 論理学・形而上学教授」ウイリアム ハミルトンによって与えられたものであった。

- 6) 「道徳・政治科学アカデミー (Académie des Sciences morales et politiques)」には、「人文・社会科学アカデミー」という訳語があてられることもあり、この方が現在の在り様に近いと思われるが、当時の時代背景も考えて、ここでは直訳のままにしておく。1849年にラヴェッソンが会員となった「碑文・文芸アカデミー (Académie des inscriptions et belles-lettres)」も、このあとに言及されるので、参考のため、現在の「フランス学士院 (Institut de France)」を構成する「五つのアカデミー」を創立順に挙げておく。

- ① 1634年にリシュリユウによって創設され、主として「フランス語の辞書」編纂にあたる「アカデミー・フランセズ (Académie française)」
- ② 1663年にコルベエルによって創設され、考古学・歴史・文献学に関わる「碑文・文芸アカデミー」
- ③ 1666年に同じくコルベエルによって創設された自然科学系の「科学アカデミー (Académie des sciences)」
- ④ 1795年に国民公会によって創設された人文・社会科学関係の「道徳・政治科学アカデミー」
- ⑤ 1648年にマザランが創設した「絵画・彫刻アカデミー (Académie de peinture et sculpture)」と、1671年にコルベエルが創設した「建築アカデミー (Académie d'architecture)」とが合流して、1816年に結成された「美術アカデミー (Académie des beaux-arts)」

ラヴェッソンに関わる「道徳・政治科学アカデミー」は、七月王制になってから(したがって、正式には、「王立」という名称が付される)、詳しく言えば1832年10

月26日に、文部大臣フランソワ・ギゾ(1787-1874)が④を「再組織」したものである。当時、行政的な力も有していたヴィクトル・クザンが、1834年6月22日に、再発足を記念して懸賞論文を募ることを提唱。論題は、アリストテレスの『形而上学』の「紹介」ならびに「後代への思想体系への影響」を述べ、「そこに見いだされる誤謬と真理とを追求し、論ぜよ」というものであった。当時のフランスでは、アリストテレス哲学じたいが「過去二世紀のあいだ、スコラ哲学による厚い幕で覆い隠され、一般的には不信の対象となっていた」(クザンの『道德政治科学アカデミーへの報告書』「緒言」(p. viii、*Avertissement, dans Rapport sur le concours ouvert par l'Académie des Sciences morales et politiques, 2e édition, Ladrance, 1838*)とされるから、「哲学史を、哲学それじたいに含みこむ」意図を有していたヴィクトル・クザンにとっては、格好の、あるいは必須の課題と考えられたのであろう。『略述』でのベルクソンの、誤解を生みやすい記述には、応募された九編の論文のうち「三編が優れたものと判断された」とあるが、これは、「道德・政治科学アカデミーの懸賞論文公式記録(Académie des sciences morales et politiques : *Concours de l'Académie : Sujets proposés, Prix et Récompenses décernés, Liste des Livres couronnés ou récompensés ; 1834-1900*)」に「三編」が記載されている事実に対応する。だが、実際に最優秀作として賞を得たのは、以下(および注7)に記した、ラヴェッソンとミシュレの「二編」だけである。ベルクソンは「ラヴェッソン以外に、特別にもう一人を選んだ」と記しているが、たしかに上記の「公式記録」で《Prix》と書かれているのはラヴェッソンで、ミシュレには「二番目の賞」とも訳せる表現《2e Prix》が用いられている(ただし、「若干のニュアンスの違いはあるかもしれないが、評価の差はない」という反論もあり得よう)。事実、この《2e Prix》に対しても、ラヴェッソンに贈られたのと同額の賞金1500フランが与えられている。ベルクソンが記した「三番目の作品」は「優秀」《Mention Honorable》と評価されているが、賞金は授与されていない。上記のクザンによる『道德政治科学アカデミーへの報告書』は、審査主査のクザンが応募された論文すべてに対して評価を述べつつ、選考経過を明らかにしたものであるが、そこでも、明確に、「第九番目の論文提出者(ラヴェッソン)の他に、第五番目の論文提出者(ミシュレ)にも賞金を与えるよう、文部大臣に依頼する」経緯が書かれている。ついでに言えば、道德政治科学アカデミー主催の第二回目(1838年)の懸賞論文は、アリストテレスの『オルガノン』に関するもので、バルトレミー・サンイレールが授賞しているが、ここでも「優秀」(クザンの記述では、*Mention très honorable*となっている)の評価を受けながら第二位に甘んじたのは、第一回目(1835年)に「第三位」であったディジョン高校の哲学教授ティソ

(Tissot) であった。

ラヴェッソンと同時に受賞したのは、ヘゲルの講義を聴き、後に、その著作の出版にもあたり、ヘゲル左派の中心人物のひとりともなる（フランスでは「ベルリンのミシュレ」と呼ばれた）シャルル・ルイ（あるいはカルル・ルウドヴィッヒ）ミシュレ（Charles-Louis あるいは Karl-Ludwig Michelet 1801-1893）である。論文提出時の年齢は31歳、既にベルリン大学の「臨時哲学教授」であった。(E) 本によれば、ベルリン生まれのこのミシュレは、先祖が「ナントの勅令」廃止時にフランスを去ったフランス系ドイツ人とされる。彼の受賞論文は『形而上学と題されたアリストテレスの著作に関する批判的考察 (*Examen critique de l'ouvrage d'Aristote intitulé Métaphysique*)』で、1836年にパリで出版され、1982年、パリのヴラン社から再刊された。ステファンヌ ドゥアイエおよびロジェーポール ドロワ、パトリス ヴェルメラン編の『十九世紀フランス哲学 (Stéphane Douailler, Roger-Pol Droit, Patrice Vermeren : *Philosophie France XIXe siècle*)』 (Librairie Générale Française, 1994) によれば、このミシュレは、1825年以来ベルリンで教職に就き、1845年にはシエズコウスキ伯爵と共に「哲学協会」を組織。宗教哲学に関する研究とともに、たとえば、『カントからヘゲルまでのドイツに於ける哲学の体系史 (*Histoire des systèmes de philosophie en Allemagne depuis Kant jusqu'à Hegel*)』 (1837-38) や、『ヘゲルとシェリングの論争から見たドイツ新哲学の発展史 (*Histoire du développement de la nouvelle philosophie allemande, avec des considérations particulières sur la querelle de Hegel et de Schelling*)』 (1843)、『厳密科学としての哲学体系 (*Système de philosophie comme science exacte*)』 (1876)、『歴史哲学 (*Philosophie de l'histoire*)』 (1878) 等の著作がある（上記『十九世紀フランス哲学』を参照したため、著作の表題はフランス語で書かれている）。

宗教性の根拠でもあり、しかしそこから独立してもいる「形而上学」という取り扱いかたは、ヘゲルやシェリング等が定位したものであり、ヘゲル思想との類縁性を意識していた時期のクザンの意にかなう方向でもあった。ラヴェッソン自身も、当時のドイツ観念論哲学、特にシェリングに関心を抱いていたことは、以下に見ていく事例によっても知られる。(クザンも、上記の第九番目の論文提出者—ラヴェッソン—がドイツ哲学を経て来たことは疑いがない、と記している。『アカデミーへの報告書』 p. 115)。ラヴェッソンと「ベルリンのミシュレ」の懸賞論文が選ばれたということは、内容じたいの価値によるものでもあろうが、ドイツ哲学への

傾斜を見せていたクザンの意向を反映していたという側面も、あったかもしれない。ミシュレの授賞理由に、「作者が外国人であることを考慮するのも寛容な態度であり、良い趣味ではないだろうか」（同、p.117）とクザンは付け加えている。

ところで、上記のミシュレが「ベルリンのミシュレ」と（フランスで）言われたのは、当時エコール・ノルマル・スュペリウルの若き哲学・歴史学教授であり、後に『フランス史 (*Histoire de France*)』（1833-1867）や『フランス革命史 (*Histoire de la révolution française*)』（1847-1853）等によって知られるジュール ミシュレ (Jules Michelet, 1798-1874) と区別するためであろう。ラヴェッソンは、エクトルポレからこのジュール ミシュレを紹介され（ドップ本による）、彼に私淑していた。その影響を深く受けたことは、コレージュ・ド・フランス教授になったミシュレの講義に出席するだけでなく、その「助手 (*secrétaire*)」をつとめた（「おそらく、1833年と1835年の間」。もっとも、1835年にはヴィクトル クザンの「助手」にもなっている。ドップ本、p. 59）ことから見てとれる。後に、七月王制下で、ミシュレが王立古文書館 (*Archives du Royaume*) 研究員になったときには、ラヴェッソンも文部省で「公立図書館総監察官」となっている。経歴の類似に影響関係を求めても、ここではあまり意味はなさそうであるが、「学識と芸術とを総合させた」と評されるミシュレの仕事の方向を、ラヴェッソンも踏襲しようとしていたのかもしれない。ミシュレの方も、書簡のなかで、「現代フランスの四人の批判的精神の持ち主」のなかにラヴェッソンの名を挙げるなど、それなりにラヴェッソンを評価していたことを、ベルクソンの『略述』は紹介している。もっとも、この時に一緒に名を挙げられた他の三人は、今日では無名の人物と言わざるを得ないのだが、ジュール ミシュレのラヴェッソン観を示す一例とは言えそうである。1848年2月にも、ミシュレは、「道徳・政治科学アカデミー」会員にふさわしい十人の候補者のなかに、ラヴェッソンの名を挙げている (S. Goyard-Fabre : 《Ravaisson et les historiens du XIXe siècle》 ; dans *Les Etudes Philosophiques*, numéro consacré à 《Félix Ravaisson》, octobre-décembre, 1984, PUF, pp. 481-495 -以下、EP-FR と略記する-)。

- 7) 「アリストテレスの形而上学について」 (*De la Métaphysique d'Aristote*)。ヴィクトル クザンは、1835年4月4日および11日の「道徳・政治科学アカデミー」例会で、二回にわたり、懸賞論文の選考結果を報告しているが、ラヴェッソンについては、「考えの幅の広さと質の高さ、語彙の範囲も広く、簡潔で、生气に溢れた高潔な言語を用いている」と、その才能を評価している（上記『報告書』）。もっとも、ベル

クソンは、後に改稿されて公刊された『アリストテレス形而上学に関する試論』と比べると、この懸賞論文は、アリストテレス哲学の「逐条的な紹介程度のもの」で、まだラヴェッソン固有の視点は認められない、と判断している。

- 8) *Essai sur la Métaphysique d'Aristote*. その第二巻の刊行年をベルクソンは「九年後」としており、後述のラヴェッソンの「自己発見」(注11参照)の項でも「1846年」が強調されている。これに対してピエール オバンク (Pierre Aubenque) は、第二巻の刊行を「1845年」としている (『アリストテレスの解釈者ラヴェッソン』《Ravaisson, interprète d'Aristote》; dans EP-FR, pp. 435, 436)。だが、フランス国立図書館のカタログは、第一巻が1837年刊、第二巻が1846年刊としており、この発行年は『フランス書誌 (Bibliographie Française)』(Pillet Ainé刊行)の1846年版でも確認されるので、1846年が刊行年であることに間違いはなさそうである。オバンクが「1845年刊」としたのは、ジュウベール (Librairie Joubert) 社から刊行された『第二巻』の「序文」にラヴェッソンが記した脱稿の日付けが「1845年12月23日」となっていることに基づくもの、と判断する。

この第二巻の序文で、ラヴェッソンは、「初めは二巻で終えるつもりであったが、全四巻とする。第二巻は、今日 (aujourd'hui) 刊行されるもので (この記述も1845年説の根拠になったのかもしれない)、古代哲学で終わっている。第三巻は、オリエントおよび西欧に於ける、中世末期までのユダヤ教、キリスト教、イスラム教に見いだされる形而上学の歴史を、第四巻は近代 (les temps modernes) に於ける形而上学の歴史と全体の結論を扱う」と予告していたが、第三巻、四巻として完成されたものは、実際には、なかった。シャルル ドヴィヴェズが『アリストテレス形而上学についての試論：第三巻の断片』として、パリのヴラン社から1953年に刊行したものは、「ヘレニズム、ユダヤ教、キリスト教」にかかわるラヴェッソンの草稿を集めたものである (Charles Devivaise : *Essai sur la Métaphysique d'Aristote - Fragments du Tome III (Hellénisme - Judaïsme - Chirstianisme ; J. Vrin, 1953)*。

- 9) 上記注8のピエール オバンク論稿では、ラヴェッソンのアリストテレス解釈が「ドイツ観念論の影響を受けた」「アリストテレスに関する解釈学上の重要な、独自の貢献」であり、特に、『形而上学』の原文にそって、アリストテレスが同一の主題を取り扱う場合でも「論証的 (ディアレクティック)」な方法と「哲学的」な方法とを区別していることを指摘した点など、「注目すべき」分析を行なっていると

している。だが、同時に、その解釈は時に「性急にすぎ」、「翻訳と文意解釈とを混同しており」、「解説」も「あまりにも自由になされている」という評価が与えられている (p. 437)。また、(E) 本のジャック ビヤールは、ラヴェッソンは、宗教的な面でも方法的な面でも、初めからアリストテレス主義者ではなかった、アリストテレス研究はクザンの忠告にしたがっただけである、と見ている (p. 21-p. 22)。とはいえ、ラヴェッソンの晩年の記述にもアリストテレス的用語は多く用いられているから、その影響をまったく無視することは妥当ではあるまい。いずれにせよ、アリストテレスを素材にしなが、ラヴェッソンが独自性への道を求めていたことは、多くの評者が共通して認める点である。

10) 『*Speusippi de primis rerum principiis placita qualia fuisse videantur ex Aristotele*。』スペウシッポスは「前四世紀のアテナイの人。プラトンの甥で、プラトンを継いで第二代目のアカデメイアの学頭であった」(山本光雄編『初期ギリシア哲学者断片集』)。アリストテレスのスペウシッポスへの言及は、たとえば『形而上学』第七卷第二章(出 隆訳、岩波文庫版、上巻p. 229)にある。明らかに名指ししたのではなくてもスペウシッポスを指していると理解される部分は、同書訳注を参照するかぎり、第一卷第九章(同上巻p. 66(訳注p. 338)、第十二卷第一章(同下巻、pp. 134,135)、第十章(同p. 166)、第十三卷第一章(同p. 171)、第二章(同p.176)、第六章(同pp. 191、192)、第九章(同pp. 212-216)、第十四卷第一章(同p. 222)、第三章(同pp. 234, 236)、第四章(同pp. 240-241)、第五章(同pp.242, 244)等々にある。また『ニコマコス倫理学』(高田三郎訳、岩波文庫版)でも、第一卷、第六章(p. 26)などで取り上げられている。また、上記注2で言及した『哲学的遺書および断片』でも、スペウシッポスとアリストテレスとの、第一の原因についての挿話が扱われている(p. x)。

11) ベルクソンによれば、ラヴェッソンは、若い頃から、ダヴィッド(Jacques・Louis David, 1748-1825)の弟子であった画家ブロック(Broc)や、アングルの弟子であった素描画家シャセリオ(Théodore Chassériau 1819-1856)などに「自宅に来てもらって」絵を習っていた、という。ドップ本にも、幼いラヴェッソンが「ヴァイオリンやデッサン、水彩画、油絵、それに彫刻も習っていた」とある(p. 3)から、「お稽古」としても、年期は入っていたということであろう。同じくベルクソン本では、画家アングルが、ラヴェッソンのデッサンには「魅力がある」と評価したという。上記注2で述べたように、アングルとラヴェッソンは、晩年、同じ建物に住んでい

た間柄であるから、単なる社交辞令の可能性はあるが、大家の評価それじたいは、文字どおりに受け取っておくべきものなのかもしれない。

ベルクソンが言うラヴェッソンの「自己発見」とは、ラヴェッソンが、アリストテレス哲学の解釈の延長にレオナルド・ダ・ヴィンチの芸術観を、いわば「接ぎ木」したこと、つまり、「芸術は変容された形而上学であり、形而上学は芸術についての考察であり、両者に共通する精神的な直観のちからが哲学の深さ、芸術の偉大さをもたらしている」という事実を、ラヴェッソンがこの時期に自覚的に捉えたこと、を指している。ベルクソンのこの言葉は、ベルクソン自身がみずからの哲学の傾向性を語ったもの、と解釈することも可能かもしれない。ラヴェッソンの『習慣について』は、ベルクソンによるならば、ラヴェッソンが捉えたこの「事実を、方法として応用した作品」ということになる。他方、ドップ本は、ラヴェッソンが義父でもあるポレに、研究上の「よりいっそう総合的な省察のプログラム」について語った、という事実を重視して、「自己発見」の時期を1843年に求めている (p. vi)。

- 12) 1836年当時は「コレージュのアグレガシオン (Agrégation des collèges)」と呼ばれるものであった (collègeについては、上記注4参照)。受験者10人のうち6人が合格、首席がラヴェッソン、後に文部大臣や首相となったジュール・シモンが第二位の成績であった (ただしドップ本は「同成績の二位」としている)。(E)本にはこの時の試験の内容が詳述されている (p. 7-p. 11) が、ここでは省略する。受験時のラヴェッソンの「肩書き」は、コレージュ・ロランの「復習教員 (répétiteur)」。現在の制度にも通ずる「高等教育アグレガシオン」(Agrégation de l'enseignement supérieur) は、文部大臣ヴィクトル・クザンによって1840年に創設されたが、その後の改革により、哲学部門は歴史部門とともに1852年の改革で廃止され、1863年のヴィクトル・デュリュイ文相の時に復活した。後述するように、ラヴェッソンはこの復活されたアグレガシオンの審査主査 (Président du jury) に任命されている。
- 13) 「文部省」とした役所名も、直訳では「公教育省」《*Ministre de l'Instruction publique*》となるが、本稿では「文部省」で一貫させることにした。以下の部局名なども、統一された訳語があるのかもしれないが、ここでは、読み取りやすい表現に換えてある。ただし、ラヴェッソンの役職名について言うなら、「官房長」とした役職は、(E)本では《*directeur de Cabinet de De Salvandy*》、ドップ本では《*chef de secrétariat et du cabinet (de De Salvandy)*》と書かれており、1839年の「公立図書館総監察官」の方

は、(E) 本では《 *Inspecteur général des bibliothèques publiques* 》だが、ドップ本では最後の“publicues”が欠けており、ベルクソン本では“Inspecteur”のみで、“général”が落ちている。このように、必ずしも統一された同一名称ではなく、文献に応じて異なっている。1845年の「参事院調査員」は“*maître des requêtes au Conseil d'Etat*”。“*Conseil d'Etat*”は、第二帝政下では立法府の機能も果たしていたとされるが、ラヴェッソンの着任は1845年であり、とすれば、この“*maître des requêtes*”は、「請願審理官」という訳語（いずれも『新スタンダード仏和辞典』による）の方がふさわしいのかもしれない。ただし、ドップ本では、1837年の職務と同じく、《 *chef de secrétariat et du cabinet (de De Salvandi)* 》としか書かれていない。

- 14) 教職については名目上であった、という説は (E) 本を採用している。ただし、そこでは、「ラヴェッソンには、単に哲学教授になる以上の、別の望みがあった」という説明 (p. 14) があり、クザンの「妨害」によって大学での経歴を断たれたというベルクソン説を否定している。文部省の仕事との兼職は、「非常勤講師」となるには他に職を有していなければならない、という今日のフランスの大学での採用条件と関連させたのかもしれないが、おそらくはドップ本に基づいた解釈であろう。なお、その他の項目は、代講者の名も含めて、ドップ本の記述 (p.5) に拠っている。「ラヴェッソンは田舎の生活が大嫌いであった」というのも、ドップ本（同じく p. 5) の表現。
- 15) シェリング (1775-1854) は、ベルクソンの記述によるなら、フランス語をあまり解さず、ラヴェッソンもドイツ語を話せなかったから、ふたりの「会話」も、はずんだものではなかったと思われる。ラヴェッソンとシェリングのあいだには、直接的な影響があったというよりも「自然な気質の類似」があった、とベルクソンは見ている。当時のフランスでは、シェリングの人气が非常に高かったというから、そういう「ジャーナリスティックな」契機も、社交好きなラヴェッソンを考えれば、無視できないかもしれない。上記注1 (A) 本の編者ジャン バリュジは、その「序文」で、ラヴェッソンの自筆原稿に残されたドイツ語とそのフランス語への翻訳から判断して、シェリングの『神話哲学』をラヴェッソンが翻訳することになっていたと推理している (p. iv. (E) 本もこのことを暗示)。いずれにせよ、この頃のラヴェッソンがシェリングに傾倒していたことは、後述する「シェリング論文の翻訳」(注30参照) に付した解説で、「今世紀最大の哲学者 (*le plus grand philosophe de notre siècle*) シェリング」という表現を用いていたことから窺える (*La Revue*

Germanique 誌 1835 年 10 月号、p. 3)。

- 16) ここで言われている「書評」は、上記注 5 で言及した「現代の哲学—ハミルトン氏の『哲学断片』」である。また、ラヴェッソンが編集した（ただし、②、③と④のオタンの部分については、校閲しただけで解説等を付してはいない）図書館関係カタログ等は以下のもので、いずれも、フランス国立図書館の「ラヴェッソン」の項に記されている。①『ラン図書館写本目録』（*Catalogue des manuscrits de la Bibliothèque de Laon*, 1846）②その『付録』（*Appendice au Catalogue des manuscrits de la Bibliothèque de Laon*, 1853）③『オタン神学校図書館写本目録』（*Catalogue des manuscrits de la bibliothèque du Séminaire d'Autun ; Revu par ...*, 1846）④『公立図書館写本総目録 第一巻』 オタン、ラン（*Catalogue général des manuscrits des bibliothèques publiques : Tome 1. Autun, (revue par...); Laon, (par...)*, 1849）。この他に、文部大臣に宛てた『報告書』もある。⑤『西部諸県に於ける図書館について』（*Rapports au ministre de l'Instruction publique sur les bibliothèques des départements de l'Ouest*, 1841）。

この前後に出てくる人名、地名、役職名等のフランス語表記を示しておく、ラヴェッソンを重用した文部大臣の名は Narcisse-Achille de Salvandy。この姓を (E) 本は *Salvandi* と記すが、ドップ本およびベルクソン本は *Salvandy* である。ラヴェッソンの代講をしたのは Francis Riaux。ラン (Laon) はパリの北東約 100 キロメートルに位置し、ピカルディ地方エヌ県の県庁所在地、オタン (Autun) はソオヌ・エ・ロワール県の郡庁所在地で、ディジョンの西南約 70 キロメートル。両都市とも、大聖堂で知られる。「高等教育総視学官」は “Inspecteur général de l'enseignement supérieur”、「文部審議会委員」は “membre du Conseil supérieur de l'Instruction publique”（ただし、ドップ本では “Conseil” の後に “supérieur” ではなくて “impérial” がついている）。文部大臣 ヴィクトル デュリュイ (Victor Duruy, 1811-1894. 歴史家としても知られ、1884 年にアカデミー・フランセーズ会員に選ばれている。文部大臣の在任期は 1863-1869 年) は、ラヴェッソン同様、ジュウル ミシュレに私淑するエコール・ノルマル・スュペリウルの学生グループの一員であった。ベルクソン本には、ヴィクトル デュリュイは「コレージュ ロラン」でラヴェッソンと「同級生」とあるが、『道徳・政治科学アカデミー会員略歴』には、デュリュイは 1824 年から 1830 年まで「コレージュ サント・バルブ」にいたとされている。この「コレージュ サント・バルブ」は、パリ五区、パンテオンの近くにあり、「1822 年から 1826 年までジュウル ミシュレが歴史を教えていた」(と、「パリ歴史案内」標識の記述は伝えている…)

「コレージュ サント・バルブ」、通称「コレージュ モンターニュ・サント・ジュヌヴィエーヴ」(GDELによる)であろう。1460年創設という由緒あるこの学校には、イグナチオ ロヨラやフランシスコ ザヴィエル、それにおそらくはジャンカルヴァン(カルヴィン)も学んだとされる。1798年には、革命の影響もあり、「諸科学ならびに學術のコレージュ、旧称サント・バルブ (Collège des Sciences et des Arts, ci-devant Sainte-Barbe)」と改称している(「旧称 (ci-devant)」という表現は、革命当時、「旧貴族」などと自称した時の言い方に相応する)。だが、「パリ歴史案内」標識には、コレージュ サント・バルブとコレージュ ロランとが同じ学校であるという記述は見出されない。いずれにせよ、当時は、現在よりもはるかに学生同士の交流が頻繁であった、という状況にあったようであるから、ことさら出身校が同じか否かを確定する必要はない、とも言える。ラヴェッソンの属した学生グループには、後にやはり文部大臣となったジュール シモン (Jules Simon, 1814-1896、上記のように、ラヴェッソンと共に大学教授資格試験(アグレガシオン)を受けた、エコール・ノルマル・スュペリウルの学生。ナポレオン三世に反対して哲学教授職を去り、共和派の政治家となった。後に文部大臣、1876年には首相)や、ジュール ルヌヴィエ(哲学者シャルル ルヌヴィエの弟)などがいた。(上掲 S Goyard-Fabre : 《 Ravaisson et les historiens du XIXe siècle 》 ; dans EP-FR, p. 482)

- 17) イッポリット フランドラン (Hyppolyte Flandrin 1809-1864) は、アングルの弟子にあたる画家・素描家。パリのサン・セヴラン教会やサン・ジェルマン・デ・プレ教会等の大規模な壁画を伝統的な手法で描き、当時のアカデミズム公認の理想主義的宗教画家として知られ、ナポレオン三世が鼻屑にしていた肖像画家でもあった (*Petit Robert 2*による)。(E) 本は、この「検討委員会」のメンバーとして三人の画家だけを挙げているが、実際にはラヴェッソン以外に10名の委員がいて、その内訳は、画家が7人(デッサン学校長1名を含む)、建築家、彫刻科各1名、「文部省」(ここのフランス語での正式名称は“*Ministère de l'Instruction publique et des cultes*”)の担当者1名であった。ラヴェッソンが文部省に提出した『リセに於けるデッサン教育についての報告書 (*De l'enseignement du dessin dans les lycées*)』(文部省刊。報告書にラヴェッソンが記した日付けは1853年12月28日であるが、表紙には「1854年」刊と記されている。なお、ドミニック ジャニコ編『エフ・ラヴェッソン、ギリシャの芸術と秘儀 (*F. Ravaisson - L'art et les mystères grecs*; L'Herne, 1985)』の記述 (p. 239)によれば、同じく1854年にP. Dupont社からもこの『報告書』が刊行されたようである)の「前書き」では、フランドランは「歴史画家」とされているが、

ラヴェッソン自身が書いた本文では、アングルなどと同様、「Institut会員」、つまり、Académie des Beaux-Artsの一員という、より権威ある肩書きが付されている。ただし、ドラクロワは単なる「歴史画家」。なお、これら検討委員会メンバーのうち3名（そのひとりにはアングル）は、ラヴェッソンによれば、他の仕事があったり、あるいは事故のために、実際の討議には参加しなかったとされる。(E) 本は「文部省令」の日付けを「1853年6月21日」としているが、なぜこの日付けを採用したのか、不明。この『報告書』のpp. 74-76に全文が記載されている「文部省令」の日付けは「1853年12月29日」である。

- 18) Ferdinand Buisson 編: *Dictionnaire de Pédagogie et d'instruction primaire* の、Dessin の項目 (Hachette, 1882)。上記注1で言及されたラヴェッソンの「芸術 Art」という論考は、この辞典の一項目として収められたものである。ただし、本稿でデッサンについて言及する場合は、この辞書の項目ではなく、上記注17のラヴェッソンの『報告書』に依拠する。(E) 本は、デッサン教育に関するラヴェッソンとペスタロッチの方法の相違を述べている (p. 16) が、その殆どの論点は、既に、ボフレ本 (注1参照) で詳細に記されている (pp. 26-28)。辞典の編者フェルディナン ビュイッソン (1841-1932) は共和派の政治家・教育学者。1879年に小学校の校長となり、文部大臣ジュール フェリ (Jules Ferry, 1832-1893) と共同して教育の「非宗教化」をめざした。1896年にはソルボンヌの教育学教授となっている (1902年に、このビュイッソンの後任となるのが、後の社会学者エミール デュルケーム)。ドレフェス派であり、人権連盟 (Ligue des droits de l'homme) の創設者のひとりでもあったビュイッソンは、後に、義務教育、女性の参政権等を推進する政治家として活躍し、1927年にノーベル平和賞を受けた。

- 19) 『十九世紀フランス哲学に関する報告』 (*Rapport sur la philosophie en France au dix-neuvième siècle*)。1867年のパリ万国博覧会の際に、「十九世紀に於けるフランスの産業・文化の進歩を再確認」しようとする試みの一環として、フランス哲学の現状確認が求められ、ラヴェッソンに執筆が依頼されたものである。題名は厳密に言えば、『フランスに於ける文芸および諸科学の進歩に関する報告集 (*Recueil de rapports sur les progrès des Lettres et des Sciences en France*) の一部門としての『十九世紀フランス哲学 (*La Philosophie en France au XIXe siècle*)』である。1868年に帝国印刷局 (Imprimerie impériale) から刊行され、その後、1885年、1889年、1895年、1904年に再版されたが、内容の異同はないとされる。本稿で参照したのは、1895年版に基

づいた上記注1の(C)本。

なお、この『十九世紀フランス哲学に関する報告』の書評として、『文部(省)雑誌 (*Revue de l'Instruction publique*)』に、「ラヴェッソンは、クザンが死んでから、クザン哲学を厳しく批判をしている」という趣旨の批判が発表された。著者は、後にリセ・コンドルセでアンリ・ベルクソンの哲学教授となるバンジャマン・オベ (Benjamin Aubé) (ベルクソンが入った時のリセの名称はリセ・フォンタヌ (*Lycée Fontanes*) であったが、後に、リセ・コンドルセとなり、その後またフォンタヌの名に戻り、さらにコンドルセに代っている)。『ヴィクトル・クザン—折衷学派とフランス哲学の将来 (A.F. Gatién-Arnoult : *L'Ecole éclectique et l'avenir de la philosophie française*)』Toulouse, E. Privat, 1867) によると、「その名が今世紀のフランス哲学界で最も高く鳴り響いていた」クザンも、1850年以降は、「かつての栄光は影となり、その影も消え失せていく」状況にあったという。そのような状況下で、しかも死後という、反論不可能な状態になってからのラヴェッソンの批判は許し難い、という反撥である (E本のジャック・ビヤールもこの立場をとる)。これに対してジュール・ラシュリエ (1832-1918) が、ラヴェッソンは既に1840年にメヌ・ド・ピランと対比させてクザン哲学の批判を行っていた (上記注5の書評「現代の哲学—ハミルトン氏の『哲学断片』」をさす) と指摘・反論した。事実、後述する (下記注27) ように、既に1835年のシェリング論文の翻訳に於いても、ラヴェッソンの反クザンの方向性は見られていたわけであり、以後、1840年頃までには、クザン批判の立場は確定していった、と見てよさそうである。いずれにせよ、当時のフランス哲学の潮流のなかで、ラヴェッソンとクザンとの関係・位置が窺える挿話ではある。

- 20) 1820年に発見されたミロのヴィナスは、主たる二つのブロック (上半身、下半身) と、付属する小さな断片 (りんごをもった左手、左腕) のまま、翌年ルヴール美術館に送られ、そこで「組み立て」られたものである。1870年、プロシャとの戦いでパリが包囲された時、戦火を避けるため、梱包の上、ルヴールの展示場からその地下室に安置された。戦後の翌1871年6月、元の展示位置に戻す際に、「移送」に関する調査書が作成されたが、この調査に従事したのが、当時、「ルヴール美術館古代および近代彫刻学芸員 (*conservateur des antiques et de la sculpture moderne au Musée du Louvre*)」 (“*conservateur*” は、通例、「学芸員」と訳されるが適訳であろうか?) であったラヴェッソンである。ラヴェッソンの報告によれば、「各ブロックを固めている石膏が湿気によって柔らかくなった点を除けば、彫像じたいに (移送による)

損傷はなかった」。だが、細部の点検を通じて、ラヴェッソンは1821年の「組み立て」方に問題があることを発見し、より正確な「復元」を試み、その詳細を、調査終了後の1871年に、①『ミロのヴィナス』として公刊している (*La Vénus de Milo*; Hachette, 1871. 68頁)。また、1890年10月25日の『アカデミー公開講座』でも、同じく②「ミロのヴィナス」という題で、ギリシャ神話との関わりの中かで、このヴィナス像がどのような意味を与えられていたか、についての美術的・考古学的分析を行ない、発表している (*La Vénus de Milo*; Lu dans la séance publique annuelle des cinq Académies, Institut de France。ただし、本稿で参照した②は Firman-Didot 社、1890年刊のもの。16頁)。さらに、1892年にも、パリのクランクシエック社から、同じ表題の、③『ミロのヴィナス (*La Vénus de Milo*; Klincksieck, 1892)』を刊行している (本稿で参照した③は、ドミニック ジャニコ編『エフ・ラヴェッソン、ギリシャの芸術と秘儀 (*F. Ravaisson - L'art et les mystères grecs*; L'Herne, 1985)』に収められたもの)。これら①②③の三つはフランス国立図書館のカタログにも記載されているが、上記ジャニコ編本 (p. 239) は、さらに、同じく1892年の『碑文・文芸アカデミー論文集 (*Mémoire de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres*)』にも④『ミロのヴィナス』が掲載されたとしている。本稿で参照したのは、上の①と②、③であるが、①が「調査報告」であるのに対して、②、③は美術・考古学的論文の体裁をとっており、言わんとする内容も同一ではない。②は講演草稿であり、それをさらに展開させたものが③と言える。④は、ジャニコの紹介の仕方では、③と同一内容のようにも読まれるが、現時点まで未見であり、直接、確認していない。上記ジャニコ編本には、ルーヴル美術館に於ける1985年の時点での「古代ギリシア・ローマ彫刻部門学芸員」(つまり、かつてのラヴェッソンと同じ職責を占めていることになる) アラン パスキエが、ラヴェッソンの仮説 ((a) ミロのヴィナスは「マルスをなだめるヴィナス」という群像の一部であり、(b) そのモデルとなったのは、フィディアスあるいはその弟子アルカメヌの彫刻作品である、等) について、「ラヴェッソンの時代には歴史的・考古学的研究がそれほど発展していなかった」ことを指摘したうえで、(a) は「除外され得ない」説ではあるが、(b) は「今日では支持するものもない、(ラヴェッソンの) 主観的な判断」としている (pp. 241-242)。

- 21) ベルクソン本が伝える「比較彫刻美術館」(*Musée de Sculpture comparée*) へのラヴェッソンの「貢献」は、しかしながら、一般的には殆ど知られていないようである。たとえば、GDELは、建築家ヴィオレ ル デュック (Viollet-le-Duc) が1879年に文部大臣ジュール フェリイに宛てた報告書が「フランスの記念建築物・彫刻

等をおさめる美術館の設置のために決定的に役立った」としている。また、*Paris Promenade & Histoire* (CD-Rom版, J・M Leriet et A・M Ulrich; Montparnasse Multimédia. 最近のものではあるが、刊行年不詳)によると、フランスで最初に彫刻の美術館の創設を思い描いたのはアレクサンドル ルノワール (1761-1839) で、その理想は、13世紀から17世紀までの彫刻を集めた「フランス記念建築物美術館 (Musée des Monuments français)」によって1796年に実現されたが、王党派・カトリック教徒たちの反対で1816年には閉鎖されてしまった。ジュール ミシュレは、子供の頃に見た「幻想的で奇妙な感動を与える」この「フランス記念建築物美術館」を懐かしく回想する文を残している。その後、第三共和制になって、19世紀までの「彫刻・教会などの正面入り口・彫像」(原寸大の鋳造物)、「壁画」、そして「ステンドグラス」の三つの部門を擁する(上述の)「比較彫刻美術館」が、1882年、パリのトロカデロ宮殿内に開設されることになった。だが、このCD-Rom資料にも、ラヴェッソンがその創設に関与したとは述べられていない。このトロカデロ宮殿が1937年にシャイヨー宮として改築された際に、「比較彫刻美術館」は「フランス記念建築物美術館」(Musée des Monuments français)と改称され、今日に到っている。

ところが、ラヴェッソンによるなら、彼自身がシャイヨー宮(ラヴェッソンは、「トロカデロ宮殿」ではなく、「シャイヨー宮」と言っている)に彫刻・彫像関連の美術館を設置するよう、パリ市に働きかけたことになっている。1885年11月11日、パリの「建築専門学校(Ecole spéciale d'Architecture)」に於ける記念講演で、ラヴェッソンは、「ギリシャ古代美術の鋳造物を集めた美術館(Un Musée de moulages d'Antiques)」と題して、「シャイヨー宮の右の翼に古代ギリシャの彫像美術館が開設されるに到った」経緯を述べている。1878年の万国博覧会終了後、万博事務局からパリ市に払い下げられたシャイヨー宮をどのように利用するかについて、上記の建築家ヴィオレ ル デュックは、ラヴェッソンによれば、特に関心も示していなかった。そこで、ラヴェッソン自身が彫像美術館の創設を提言し、それがパリ市に受け入れられた、というのである。回想にありがちな自己美化でないとするならば、そのような経緯は、それなりに、あったかもしれない。実際、ラヴェッソンは、これ以前にも、「創立すべき美術館(Un musée à créer)」を1874年3月の『二つの世界・雑誌(*Revue des Deux Mondes*)』に、「石膏作品をおさめた美術館の計画(*Projet d'un Musée de Plâtres*)」を1875年9月の『考古学雑誌(*Revue Archéologique*)』に発表し、彫刻関連の美術館設置の必要性を説いていたのである。なお、上記の記念講演(の記録)は、ジャンコ本の詳細な「ラヴェッソン作品一覧」には記載されていない。ドゥブ

本は講演の題名は記しているが、講演原稿を印刷したものについては未見としている (p. 343)。

- 22) 「11月9日」に選出されたという記述もあるが、ここでは『フランス文学人名辞典』(J. M. Quérand : *La France littéraire ou Dictionnaire bibliographique*, tome XI ; Maisonneuve & Larose, 1964) に於けるラヴェッソンの項の記述にしたがう。なお、50周年記念の日付け(1899年11月10日)は、上記注2のド・ラステリイ副会長の「弔辞」に基づいている。
- 23) クザンとラヴェッソンの「不仲」説は、ベルクソン本の適度に「ドラマ化」された記述によるところが大きいように思われる。ということは、しかし、ベルクソンへの伝記的資料の提供者であった肉親たちにとっては、否定し難い「実感」であった、ということかもしれない。ドップ本も、クザンの気紛れの被害者である「可哀想なラヴェッソン」という内容を記した、ポレ夫人の夫に宛てた1837年の手紙を紹介している (p. 63)。ジャン ボフレは、上記注1で言及した『ノット』に於いて、直接ベルクソン本に依拠したか否か不明であるが、「ヴィクトル クザンの敵意と、その影響によって、(ラヴェッソンは) 大学から遠ざけられた」としている (p. 17)。ドップ本は、ラヴェッソンは『二つの世界・雑誌』に哲学関係の時評を書くことになっていたが、「クザンに妨害されたため」と明記してはいないが、そういう文脈で書かれている) その仕事を取り上げられ、1842年には二回にわたって「道徳・政治科学アカデミー」の会員になるべく立候補したが(これも、「クザンに妨害されて」と明記してはいないが) 選出されなかった、と、ラヴェッソンがクザンに敵視され拒否された例を挙げている。だが、後者に関して言えば、1842年当時のラヴェッソンはまだ二十九歳であるから、年齢だけから考えても、時期尚早という見方は、クザンに関わりなく、大いにあり得たであろう。二人の軋轢の原因は、論者によって挙げる例が異なるが、①1835年から1840年前後に到る、ラヴェッソンの「クザン批判」を含んだ翻訳・書評活動に求める場合、②クザンに職を斡旋してもらったにもかかわらずレンヌ大学に行かなかったことに求める場合(上記注3のb)に示されている。かつては、レンヌ大学の職もクザンの妨害によって得られなかったと解されていたが、ドップ本の刊行で、それがラヴェッソン自身の意向であったことが示された)、さらにはその延長として、③クザンとは政治的に対立していたとされるドサルヴァンディ文部大臣の下で働いたことに求める場合、などがある。

(E) 本は、しかしながら、クザンが意図的にラヴェッソンを遠ざけた、というべ

ルクソン説には否定的であり (pp. 13, 14)、本稿も (E) 本と同じ立場を取りたい。つまり、クザン折衷哲学への「批判・対立」はあったにせよ、ラヴェッソン自身は、クザンによって人生の方向を変えられたのではなく、みずから望んだ方向を辿って行ったという観点に立ちたい。1835年から1840年にかけてのラヴェッソンの翻訳・記述を見ていけば分かるが、いずれにしてもラヴェッソンは、広義にはクザンの開いた道筋の延長にいたとしても、クザンと同じ立場には立てなかったことを示す表現が見いだされる。ドップ本の記述を採れば、ラヴェッソンの辿ったこの方向は、義父エクトル ポレの方向であったということにもなる。「ラヴェッソンには、単に哲学教授になる以上の、別の望みがあった」という (E) 本の立場については既に述べた。

- 24) エミール アコラス (Emile Acolas, 1826-1891) は共和派の法学者、ジャーナリスト。ヨーロッパ全体の民主派組織の形成に努力し、パリ・コムンヌ期には、本人不在のまま、パリ大学法学部長に任命されたこともある。労働者のための法律学校を開こうとしたり、啓蒙的な法律書を多数刊行したが、最後には自殺。ジュール バルニ (Jules Barni, 1818-1878) は、哲学者、政治家。新制度に於ける哲学の最初の大学教授資格試験 (1840年) に合格。ルイ・ナポレオンのクーデタに抗議してルウアンのリセ教授を辞職し、以後、政治活動に専念した。カント学者としても知られ、ラヴェッソンも、『十九世紀フランス哲学に関する報告』で、カントの翻訳者としてバルニの名を挙げている (上記注1の (C) 本、p. 70)。中江兆民への「影響」は、たとえば、兆民の『三酔人経綸問答』の記述に見られる。
- 25) ラヴェッソンが社交界での交流を好んだという点は、ほとんどすべての資料に記されている (特に、上掲 S Goyard-Fabre : 《Ravaisson et les historiens du XIXe siècle》 ; dans EP-FR, pp. 485-486。その典拠は、おそらく、子息たち等からの「聞き書き」に基づいたベルクソン本であろう)。だが、そのことは、ラヴェッソンが容姿端麗で社交界の寵児となり得たような「伊達男」であったということにはならない。ポフレ本は、上記注2で言及したシャルル ドヴィヴェズ編『哲学的遺書および断片』の冒頭にラヴェッソンの「スピリチュアリズム的 (心霊術的?) な肖像があるので参照せよ」と記しているが、この肖像は、フランス国立図書館「版画部門」所蔵で、ドミニック ジャニコの1969年版『ラヴェッソンと形而上学』の内扉に挿入された肖像写真 (1997年の再刊本では削除されたことは、上記注1に記したとおり) と同じものと思われる。哲学者アランがラヴェッソンを「頬ひげのある白い猿」、そし

て『哲学語彙辞典 (*Vocabulaire technique et critique de la philosophie*)』の編纂で知られるアンドレ ラランドはラヴェッソンを「ゴリラ」と形容したことも、ボフレは、ついでに記している。メヌード ビランやラシュリエ、ブトルウなど、他の哲学者について語る時には容姿に言及していないことと比較すると、ボフレは、よほどラヴェッソンの「特異な顔つき」を後代に伝えておきたかったようである。たしかに、この写真のラヴェッソンは「盛装した猿」と見られなくもない。ボフレは、さらに、ラヴェッソン宅でダンスに興じたことのあるデルクウル夫人の、ラヴェッソンは「美男子ではなかったが、何か威厳にみちた (*majestueux*) ところがあった」という証言もわざわざ記録している (いずれも p. 17)。「猿」や「ゴリラ」からでさえ「威厳にみちたところがある」という印象を受けることはあるが、ラヴェッソンの場合は、ふだん、あまりにも「猿やゴリラ」的であったからこそ、ことさらに、そのような(「威厳にみちたところがある」という)感想が口にされ、後代まで残されるに到ったのであろう。(E) 本は、上のラヴェッソンの肖像写真に基づいた(と思われる)素描画を表紙に掲載しているが、「猿」にはほど遠い「常人」の顔つきに「修正」(?) されている。

- 26) ジョゼフ フェッラーリ『サラリーマン化した哲学者たち (Joseph Ferrari : *Les philosophes salariés*)』(Sandre, 1849; rééd. Payot, 1983)。この著作(パンフレット)は、パトリス ヴェルムランの「ラヴェッソン、その時代と著作」(Patricce Vermeren : *« Ravaisson en son temps et en sa thèse »*; dans *Les Etudes philosophiques*, numéro consacré à *« Ravaisson, l'Intelligence de l'habitude »* janvier-mars, 1993 ; p. 65 ; PUF —以下、EP-RIH と略記する—)でも、そして、クザンの「折衷哲学のブルジョワ的楽観主義」に関するルネ ヴェルドナルの論考でも(ルネ ヴェルドナル:「フランス・スピリチュアリズム—メヌード ビランからアムランまで—」『哲学史・理念・教義』(フランソワ シャトレ編、アシェット社、1973年刊)の第六巻、『科学工業時代の世界の哲学、1860年から1940まで』(René Verdenal : *« Le spiritualisme français — De Maine de Biran à Hamelin — »* ; p. 55 du tome 6 : *La philosophie du monde scientifique et industriel 1860 à 1940, de l'Histoire de la philosophie, Idées, Doctrines*; rédigée sous la direction de François Châtelet, Hachette, 1973) 引用されている。整備されつつあった近代的な教育体制のなかで、大学に講座を有する哲学者が、研究者かつ教育者としての地位を確定し始めたのは、概括的に言えば、この頃からであった。その意味では、ヴィクトル クザンは、好むと好まざるとに関わらず、新しい時代の学者の象徴的な存在として、現実的なちから(権力)・意義も有するに到ったということかもし

れない。ミラノでヴィコ（Vico）の著作を出版していたジョゼフ フェッラーリ（1812-1876）は、フランスに来て、ストラスブールでプラトンについての講義をしたり、『歴史哲学の原則と限界について（*Essai sur le principe et les limites de la philosophie de l'hisotire*）』（1847年）、『マキアヴェリ、現代に於けるさまざまな革命の審判者（*Machiavel, juge des révolutions de notre temps*）』（1849年）などを著した。1859年にはトリノ（イタリア）の議員に選出され、カヴールに対抗して連邦制を擁護。他に、『国家理由の歴史（*Histoire de la raison d'Etat*）』（1860年）、『中国とヨーロッパ（*La Chine et l'Europe*）』（1867年）などの著作がある（いずれの題名もフランス語表記を記す）。

- 27) ドップ本は (pp. 14-16)、初期には革命的ロマン主義者、自由主義者として登場したクザンであるが、1813年から始めた講義がその革新的な思想性のために、1818年には禁止され、1828年に再開を許可されたものの、「国民全体にわたる教義」を打ち立てるというクザンの志向が強まるにしたがって（同時に、クザン自身の大学での地位が確定していくにしたがって）、主としてカトリック勢力との妥協のため、初期の革新性を喪失していったと見ている。その具体例として、ドップ本は、①1826年刊の『哲学的断片（*Fragmens Philosophiques*）』が、1833年の第二版では「彼の新たな方向に合致するよう」、ことさらに説明もなく改変された（“*dénaturé*”）こと、②1818年にパリ大学文学部で行なわれた『哲学講義録（*Cours de philosophie professé à la Faculté des lettres pendant l'année 1818*）』が、1845年の第二版では歪曲された（“*défiguré*”）ことを挙げている。
- 28) 眼にした限りで言えば、殆どの論者が否定的な側面からクザンを紹介しているのに対し、上記注1の（E）本に於けるビヤアールの「序論」解説が、ほとんど唯一の例外で、そこでは比較的「公平な」クザン像が描き出されており、しかも、ラヴェッソンの思想じたいがクザンの影響下にあったことを、いくつかの例によって示している。たしかに「フランスでの思想的な流れ」で言うなら、ラヴェッソンの考えも結局はクザン学説の内部に含まれる、という見方もあり得る。ドップ本も「多くの本質的なテーマでラヴェッソンはクザンの学説に同調している」と認めてもいる（この点の検討は後述の予定）。既述の（上記注19）、1867年1月のクザンの死を悼み、それをきっかけになされた講義をまとめたガティアン アルヌウルによる『ヴィクトル クザン—折衷学派とフランス哲学の将来』でさえ、客観的な評価と同時に、やはり全体的には「皮肉な視線」が投げかけられているように感じざる

を得ない。「女性文学史」関係のクザンの作品には、①1853年の『ド・ラングヴィル夫人 (*Madame de Languerville*)』, ②1854年の『ド・サブレ夫人 (*Madame de Sablé*)』, ③1856年のド・シュヴルゥズ公爵夫人 (*La Duchesse de Chevreuse*)』と④『ド・オートフォル夫人 (*Madame de Hautefort*)』等があり、それぞれの副題の「著名な女性と十七世紀の社会に関する (新しい) 研究 (*Nouvelles études sur les femmes illustres et la société du XVIIe siècle*)」が示すように (ただし「新しい」は上記の①にはついていない)、社会文化史的な叙述にもなっているが、クザンのこの試みを真剣に受けとめる人も少なく、「(さまざまな哲学者の後を追いかけてきた) クザンは、今度はついに高貴な女性の後を追いかけて始めた」などと嘲笑されるありさまであった。なお、クザンの「折衷」とは、「デカルト、スコットランド学派、それにカントの思想を、“スピリチュアリズム”の体系の中に結び付けること」(この要約じたいはGDELによる)であったが、これについては次節で扱う。それにしても、ヴィクトル クザンほど、一時期は名声をほしいままにしながら、後には酷評され忘れ去られた哲学者は珍しいのではないか。ヘーゲル・シェリング等の新しいドイツ思想紹介者として華々しく登場した若きクザンも、やがて、その内容空疎な教義のために、ジュウル ミシュレからさえ「イタリアの大パントマイム俳優」と揶揄されている(リュシアン フェブル『ミシュレとルネッサンス』邦訳p. 88)。かつては雄弁な講義によって知られたクザンであるが、見方を変えれば、エクトル ポレ夫人も「クザンはわたしが知っているかぎり、いちばん、サーカスの芸人みたいな(サルタンバンクな)ひとだ」と述べている(ドップ本、p. 63)ように、その主張すら、誠実さのないその場限りの演技としか受けとめられなかったようである。だが、ことによると、このような評価の変動は、クザンだけでなく、「過去の存在」となった哲学者の殆どすべてにあてはまることなのかもしれない。圧倒的な知的影響力を同時代の人々には与えながら、社会・文化の変遷にともなって、あるいは状況の変化(もしくは風化)とともに、忘却の対象になる哲学者・思想家は無数にあることを、クザンが、一例として、端的に示しているだけ、かもしれない。

- 29) 「哲学史」への傾斜も含めて、1826年の『哲学断片』でヘーゲル思想(の一端)をフランスに紹介したのはクザンの功績であるが、クザンの思考は、自身も認めているように、ヘーゲル的にはならなかった。もともと、対立にはそれなりの根拠があるはずだから、対立項の統一あるいは調和を言うならば、その推移・移行の原則が述べられなければならない。クザンの「折衷」という語彙には、対立物の調和・平衡を重視する趣きはあるが、それじたい、静的・平板であって、ヘーゲルの「弁証

法的統一」に見られるような、意識の「経験・生成・発展」という〔感覚・意味・方向〕性、その運動の契機・展開としての「論理・自然・精神」という存在様態を捉えてはいなかった。これは、ヘーゲルの立場に立つか否か、という観点から言うのではなく、思考の論理的展開への配慮に於いて、ヘーゲルの構想に匹敵し得ていなかったのではないか、という点を指摘したいからである。確かに、対立する論の両者の利点をともに吸収しようとする立場は、中途半端で曖昧な立場を設定するだけに、自身を説明する論理も形成し難いし、他者に了解を求めることも至難であるにしても。本来的に困難な課題に向かったクザンの「折衷」設定であるが、結局のところ、抛りどころとした立場の説明が不十分であり、不明確であったと言わざるを得ない。そして、理論の不徹底さを補うためにクザンが援用したのが、理論の親近性を装うための、(たとえば)ヘーゲルとの個人的な親交である。ある時点では、自身の思想を外部的に支えるためにヘーゲルとの「つき合い」を利用したとさえ思われる。今日から見返せば、クザンのこのような態度に、当時のフランス哲学の「後進国性」が典型的に現われている、と思われるのではないのか。たとえば、クザンがヘーゲル思想から影響を受けたことを明言するのは、①1824年のプロシャ旅行中にクザンがヘーゲルと会った時、②その三年後の1827年にヘーゲルがパリにやって来た時、の二回であるが、このような状況下での発言は、「本家」の権威を借りて自身の思想性を飾り立てようとした、狡猾な自己主張とさえ見られ得る。「共和派」の一員と判断されてベルリンで拘束されたクザンが、ヘーゲルの尽力で釈放されたという逸話も、結局は、クザン自身の政治姿勢の曖昧さ、ヘーゲル本人への依存・従属の実例として記憶されるにとどまる。シェリングは、「ヘーゲルの哲学を殆ど、あるいは全然理解できていないが、それでも、ヘーゲル哲学の伝播を試みてみよう」とクザン自身が述べたことも紹介している(下記注30。シェリング「序文」p. 23、*Revue Germanique*)。あるいはまた、「ヘーゲルよ、私に真理を伝えてほしい、そうすれば、私がそれを、理解され得る範囲で、私の国に広めよう」というヘーゲル宛書簡(1826年8月1日付)。このような対処の仕方は、1840年以降、日増しに反ドイツ感情が昂まり、ついには1870年の普仏戦争へとなだれこんでいくフランス国民を納得・理解させる「思想」になりそうにはない。いずれも、ドイツ観念論哲学への社交辞令であったかもしれないが、やはり、クザン自身の原則がどこにあるのか、が問われる記述ではある。とはいえ、ここで「後進国性」を言うのは、クザン個人の傾向性という側面も含めてではあるが、それ以上に、19世紀に於けるフランス哲学じたい、あるいは大学に於ける哲学教育の在り方じたいが、ドップ本(p. 11)の表現によれば、「我々の想像も及ばないほどに惨めな状態にあった」ことを指して

いる。この意味では、教育制度の整備に努めたクザンは、後世に自身の「惨めな」姿をさらすことになったかもしれないが、それなりの貢献はなし得た、と評価すべきなのかもしれない。

- 30) 上記注5に挙げた1840年の「現代の哲学—ハミルトン氏の『哲学断片』」もそうであるが、ここでは、それより以前、1835年の「クザン氏の哲学ならびにフランス哲学およびドイツ哲学一般に関する、シェリングの判断」(《*Jugement de Schelling sur la philosophie de Monsieur Cousin, et sur l'état de la philosophie française et de la philosophie allemande en général*》)を指す。『ドイツ雑誌 *Revue Germanique*』(Strasbourg, F. G. Leyraut, octobre 1835)の1835年10月号に発表された。シェリングの原文は、もともとは、「ヴィクトル クザンの『哲学的断片 (*Fragmens philosophiques*; 第二版、1833年刊。 *Fragmens* は当時の綴りのママ)』の「序文」に対する「批判的注釈」として、数年前に、『バヴァリア年報 (*Les Annales bavaroises*)』に発表されたものである。シェリングのかつての教え子であるベッカーズ (Hubert Beckers) が、クザンの『哲学的断片』のドイツ語訳を1834年に刊行するに際して、シェリングのこの「批判的注釈」を「序」として転載した。ただし、1834年版は、シェリング自身の言葉によれば、1833年版とは、引用文等に若干の修正が施されているという。ベッカーズの著書は *Victor Cousin über französische und deutsche Philosophie, von Dr. Hubert Bekkers* (ママ), vorrede von Schelling; Stuttgart und Tübingen, 1834。

なお、ヴィクトル クザンがヘーゲル哲学を紹介した『哲学断片 (*Fragmens de Philosophie*)』(Didier, Nouvelle édition de 1856)の1856年版にクザン自身が付した注 (p. 96) によれば、シェリングのこの(ベッカーズ著書への)「序」の仏訳はふたつあり、ひとつは「ラヴェッソン氏による翻訳で、1835年10月号の『ドイツ雑誌 (*Revue Germanique*)』に収められたもの、そしてもうひとつは、ヴィルムによる『諸哲学の国籍についての試論 (J. Wilm: *Essai sur la nationalité des philosophies*) (Strasbourg et Paris, 1853)に収録された、「クザン氏の哲学に関するシェリング氏の判断 《*Jugement de M. Schelling sur la philosophie de M. Cousin*》」であるという。

『ドイツ雑誌』のラヴェッソンの翻訳には、本文の前に、「シェリングが、新たな哲学的構想(『神話哲学 (*Philosophie de la Mythologie*)』を指す)を提示しつつあり、「ヘーゲルの論理学」に拘束されていたドイツ哲学も、再び、(シェリングのいる)ミュンヒェンを注目し始めている」といった趣旨の、ラヴェッソン自身による短い

解説が記されている。ラヴェッソンがシェリングを「今世紀最大の哲学者」と評価したのは、この解説に於いてである（上記注15）。脱稿の日付けは、翻訳の末尾に、「1834年5月」と記されている。

ついでではあるが、クザンのこの1856年版『哲学断片』の正確な表題は『現代哲学断片 (*Fragmens de Philosophie contemporaine*)』である。クザンの『哲学断片』には、他に、『古代哲学断片 (*Fragmens de Philosophie ancienne*)』、『デカルト哲学断片 (*Fragmens de Philosophie cartésienne*)』、『中世哲学断片 (*Fragmens de Philosophie du moyen âge*)』、『近代哲学断片 (*Fragmens de Philosophie moderne*)』等がある。しかしながら、引用の際に、「古代哲学」とか「近代哲学」などの部分は省略し、短縮した『哲学断片』のみで記されることも多い。クザンには、自身の哲学を述べた（既述の）『哲学的断片 (*Fragmens philosophiques*)』という著作もあり、しかも、『哲学断片 (*Fragmens de Philosophie*)』および『哲学的断片 (*Fragmens Philosophique*)』のそれぞれに、出版年度あるいは版による相違（特に「序文」）もあって、記述や読解の際に混同されがちである。紛らわしいことに、『哲学断片 (*Fragmens de Philosophie*)』は、上記注5で述べたハミルトンの翻訳本と同じ書名でもある。